

A nighttime photograph of a large, modern building with a lotus pond in the foreground. The pond is filled with large green leaves and pink lotus flowers. The building is illuminated from within, and several streetlights are visible, creating a starburst effect. The sky is dark.

あぎたの文芸
第56集

「あきたの文芸」

第五十六集

あきたの文芸 第56集 目次

●小説・評論

奨励賞
グリーン賞

明るい北朝鮮
田口奈央子

森田真

5

●詩

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

ソラプチの春
夏至の汗
多過ぎる余白
豊島カヨ子
大塚莉々

原田さゆり
佐藤愛

小林康子
鈴木敏男
金万和
金乃穂

23

●短歌

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

ラムネの瓶
小さな子のおい
日々片々
明日に向かひて
鈴木修一
高田勝彦
高橋美咲子

三浦真貴
佐々木ヨリ子
赤倉聖来

工藤美咲
加藤厚子
森田溥
佐々木鏡子
柴田敦子
成田洋子

33

●俳句

最優秀賞

日記の余白

大橋 風太

奨励賞

晋山しんざん法要ほうよう

加瀬谷 敏子

奨励賞

いのちの楽園

鈴木 修一

入選

城跡散策

田村 陽子

山崎 勝重

石川 昇

佐々木 亮子

松井 憲一

塚本 佐市

富野 三千雄

土谷 敏雄

丹野 剛紀

浅田 英夫

齋藤 瑞希

齋藤 瑞希

齋藤 瑞希

●川柳

最優秀賞

さびしんぼ

伊藤 光愁

奨励賞

郷の風

荒木 小菊

奨励賞

昭和回想

鈴木 明夫

入選

こんな夏

澤田 幸代

菅原 浩洋

佐藤 明子

佐藤 ちずる

三浦 千両

●エッセイ

最優秀賞

母と野球

高橋 文子

奨励賞

ただ、生きる

佐々木 真知子

奨励賞

日本海、帰り道、鳥海山

大久保 菜巳

入選

小林 康子

小林 康子

グリーン賞

赤倉 聖来

赤倉 聖来

●最優秀賞受賞のことば

.....

●選評

.....

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
-------	---	----	----	----	------

石倉葵 寺田和子 伊藤寛雄 片倉俊秀 柴田政幸 武田幹夫

羽田朝子 保坂英世 山中律雄 山本公平 佐々木咲子 中村寿

前田勉 古澤りつ子 佐藤茂樹 山崎如醉 渡辺修

●あきた県民文化芸術祭2023「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

奨励賞 明るい北朝鮮

兵庫県宝塚市(秋田市出身)

森 田 真

チャンギ国際空港の一階にある喫茶店で僕はムイを待っていた。

彼女の飛行機は午後七時半着のはずだが、遅延を表す delay という文字が赤く点滅している。激しいスコールのせいだろうか。

僕は甘すぎる緑茶を一口飲むと、TOEFL対策のテキストに目を戻した。長文問題を二、三問予習しているうちに彼女がやってきた。

「コートーナカ」

彼女はタイ語で両手を合わせた姿勢で謝った。紺色のユニフォーム姿が初々しくてまぶしかった。黒ぶち眼鏡をかけてよれよれのトレーナーを着ていた垢ぬけない頃がなつかしく思われた。

「マイペンライカップ」

僕も知っている数少ないタイ語で答えた。

そして、前の席に置いていた自分の荷物を床に置いて、彼女の席を作った。彼女はニッコリ笑って静かに席に着いた。

「スーツが似合っているね」

彼女は、今度は日本語でそう言うと、僕のネクタイの結び目を直してくれた。ネクタイは薄いグリーンで、こちらで買ったものだった。黒のスーツは中華街で購入した。両方も日本の六掛けの値段だった。

よく考えてみると、彼女と会っていた頃は僕も年中、長袖のTシャツにGパンのスタイルだったので、僕が彼女に抱くのと同じ印象を彼女が僕に抱いても不思議はなかった。

彼女は思った言葉をすぐに口に出す。僕は言わない。でも、僕もほめられたら、ほめかえす。それで、彼女とは良好なコミュニケーションが築けていた。

「君のスカーフもいいよ」

薄いピンクと紺色の清楚なスカーフには、日系航空会社のお馴染みのマークが入っていた。

「ありがとう」

スマイルの仕方もよそ行きの印象だった。

厳しい訓練でしつかり鍛えられた大人の女性になっていた。

僕がメニューを手渡すと、「いらない」というジェスチャーをした。

「のどは乾いてなくても、お腹は減っているんじゃない？ 何か食べたいものがある？」

僕はメニューを横に置いて、店を出る用意をした。彼女は少し考えて言った。

「チリクラブ」

チリクラブとは、丸ごと茹であげたカニにスパイシーなチリソースと溶き卵で味付けした豪快なカニ料理だ。

「それなら、ホテルに荷物を置いて、ジャンボに行こう」

「ジャンボ？」

「有名なチリクラブのレストランだよ」

「コップンカ」

ムイはタイで感謝の印を表すワイの姿勢で両手を合わせてお礼を言った。

「マイペンライカップ」

僕はカードで支払いを済ませると、彼女の荷物を引いて先を歩きだした。

「車は何に乗っているの？」

彼女は興味深そうに聞いた。

日本で一緒にいた頃は中古の外車に乗っていたので、さぞかし期待を膨らませているのだろう。

「タクシーだよ」

僕は笑いながら答えた。この国では関税の影響で庶民には車は買えない。トヨタの小型車でさえ五百万円もする。排気ガスの規制の意味合いもあるのだろう。それでも、夕方は渋滞でなかなか車は前に進まない。裕福な人間が多いのだろう。

僕たちはタクシーに乗ると、オリエンタルホテルに行くように頼んだ。

地下の乗り場から地上に出ると、最初は緑に囲まれたジャングルを走っているように思える。途中からは高層ビルが立ち並ぶが緑が消えることはない。

淡路島に東京二十三区がそのまま引越してきたような感じだ。建ったばかりの近代的で派手なビルと古くからある東南アジア特有の伝統的な建物がコントラストを上手く奏でている。

「マーライオンが見たいな」

ムイは車窓からマーライオンを探している

ようだ。ホテルとは方向が違うし、車からゆつくり見える場所にもないし、それほど大きいものでもない。

マーライオンとは頭がライオンで身体は魚の形をした像で、シンガポールのシンボルのようなものだ。世界三大ガツカリの一つでもある。六メートルくらい小さいもので、それほど印象深いものではない。

「雷が落ちて、耳を修理中らしい」

僕は笑いながら言った。

「残念」

彼女は天を仰いだ。

「後ろにいるミニマーライオンなら見ることができよ」

マーライオンの後ろには小さなミニマーライオンが静かに水を吐き出している。マーライオンの子供のような感覚なのだろう。

「マーライオンつていくつあるの？」

「僕が知っているだけで四体かな。正確な数はわからない」

セントーサ島にある三十七メートルのもう一体を思い出した。夜になると様々な色にライトアップされる。マウントフェーバー丘にも一体ある。これはこちらに住んでいないと

わからない。観光客では見落としてしまう位置にある。僕も生徒に教えてもらって知ったのだった。

「ふうん、そんなにいるんだ」

ムイは初めて見る近代都市をゆつくり眺めている。オーチャードロードに入ると、西洋色の強いブランドの店が並んでいる。色艶やかなロゴやマークが目が疲れてくる。そこを抜けると、十九世紀のイギリスを思わせる落ち着きのある洒落た街並みに変わった。白を基調とした頑丈な古いビルが立ち並んでいる。

「そろそろ着くよ」

オリエンタルホテルに着くと、ライオンのようなヒゲをたくわえた名物男のドアマンがニッコリ微笑んで僕たちを迎えてくれた。チェックインして、荷物をボーイに任せた。白亜の建物の八階のツインルームからは美しい夜景が一望できる。

「いいね」

ムイは嬉しそうに言った。少し奮発したかいがあつた。

着替えを済ますと、僕たちはフロントにキラーを預けて、MRTと呼ばれる地下鉄でクラ

ークキーまで行くことにした。

クラークキーにあるジャンボという海鮮料理屋は川沿いにあつて、様々な光のイルミネーションが夜景に高価な衣装を着せているかのような。赤色の安っぽいプラスチックでできた椅子と白いテーブルも一目で目に焼き付いて離れない夜景を見ていると、それほど気にならなかつた。

辺りからはジャズやバンドの演奏が聞こえてくる。耳も目もしっかり満足させられた上で、次は舌の順番だ。周囲のテーブルを見ていると、唾液を止めるのが難しい。

橋の上にいると、リバークルーズボートから西洋人が手を振ってくる。ムイが手を振りかえずと、嬉しそうに笑っている。一瞬どこの国にいるのか忘れてしまひそうになるそんな光景だ。

僕たちは川辺の予約席に座り、ワインで乾杯して、既に注文しておいた料理が来るのを待った。

「やつと落ち着いたね」

僕は昔の姿に戻ったムイになつかしさを覚えてきた。

「大学院時代に戻つたみたい」

ムイも僕のTシャツとGパンのラフな格好を見てそう言った。

「久しぶりに連絡をくれて良かったよ」

「こちらこそ」

ムイは髪の毛を整えながら、口元に軽く笑みを浮かべている。

「大学院を修了した後、タイに帰ってから何をしていたの？」

「忙しかつた。フライトアテンダントの試験に合格したら、日本の成田で研修が続いて、今やつと自由になつた感じ」

ムイは珍しそうに辺りを見回している。

「達也は？」

「僕はこつちにある日本法人の予備校で、日本に帰る帰国子女向けに受験のための英語を教えている」

「仕事は楽しい？」

返事に困つた。こちらにいる子は、みんな英語はできる。家庭環境が良くて、小さい頃から英語の勉強をやらされてきている。

また、英語圏の国なので、街を歩いていても英語しか聞こえてこないの、リスニングは強い。

小学生で英検二級に合格してしまう子もたくさんいる。高校生になると問題さえ与えておけば、勝手にやってくれる。後で答えを渡せば質問もない。楽だけど、楽しくはなかつた。

給料は、現地通貨に直すと、日本にいるよりは儲かつた気分になる。豪華な2LDKのマンションの家賃も会社持ちなので、待遇は悪くなかつた。

「まあまあかな」

「いいな」

ムイは羨ましそうに言った。
「フライトアテンダントになるって夢がかなつて、何か問題あるの？」

僕はワイングラスに手をかけて言った。僕の方がムイを羨ましく思っているのだ。

「いっぱいある。給料は安い。一年契約。仕事は不規則でハード。先輩は意地悪。二年以内に辞めたら、研修費を返還しないといけない」

ムイはため息を吐いた。

「いくら？」

「八万バーツ」

日本円で約二十五万円。彼女たちにとって

は給料の三カ月分くらいだ。昔の日本の看護師の御礼奉公の制度のようなものだ。

「そうか。憧れの仕事もけっこうたいへんだね」

僕がそう言うのと、ムイは黙って頷いた。

東京電工タイランドにも内定をもらっていたのに、地味な工場での経理仕事よりも、大空にはばたく華やかな客室乗務員の仕事を選んだのは彼女だ。安定よりも夢を取った。その選択は間違いではなかったと思う。

僕がもし彼女なら、同じ選択肢を選んでいただろう。東京電工に行っても多分、別の苦労はあつただろう。仕事は単調で、地味な工場服に身を包み、毎日、定時まで数字とのにらめっこだ。それはそれで楽だけれども夢のない生活だ。朝はラジオ体操で始まり、昼は工場の食堂で安いランチを食べて、五時になったらバスで帰宅する。そんな日々の繰り返しだ。

「夢が叶っただけでも、よしとしないよ」

僕は言った。

僕は大学教員の道を目指したが、修士課程修了では学歴として不十分だった。論文の数も全然足りなくて、三十校近く大学教員に応

募したが、どこからも採用されなかった。だから、今、この仕事をしている。

もちろん大学教員になつても、雑用などで振り回されていたかもしれない。今は少子化で生徒を退学させないように目を光らせておかないといけないらしい。

また、任期付きの採用で、三年後には、また仕事を探さなければならぬと博士課程を修了した知人が文句を言っているのを思い出した。

そう思うと、地位はないが、南の島でのんびりやれる今の仕事の方が良かったのかもしれない。夢はないけれども。

「そうね」

彼女は僕の第一希望の仕事を知っている。だから、僕の言葉の重みを理解してくれたようだ。

チリクラブが運ばれてきた。赤と黄色のソースの海の上に大きなカニが真ん中に陣取っている。

「食べよう」

僕はスプーンとフォークでカニにしゃぶりついた。

「アロイマイ？」

今度は僕がタイ語で聞いた。彼女がなんて答えるかはもちろんわかつている。

「アロイマーク」

ムイはさっきの話もすっかり忘れてしまったかのようにカニの虜になった。大きなカニは数分で甲羅だけになった。残ったソースは小さいパンですくって食べる。これもまた辛党の僕らには美味だった。

デザートもたらふく食った。熱い東南アジアでは、辛い物を食べた後は、甘い物が欲しくなる。舌の感覚がマヒするくらいアイスや果実を食べた。

食事が終わると、僕たちはシンガポールライヤーに乗りに入った。世界最大の観覧車で、市内のビル街やセントーサ島を一望できる。三十人乗りのカプセルもこの時間だと僕ら二人で独占できた。

「緑も多くて、所得も高く、近代都市で、良い国ね、ここは」

ムイは一番高いところから国中を見下ろしながら言った。

「でも、明るい北朝鮮って言われているらしいよ」

僕は笑いながら言った。

「明るい北朝鮮？」

ムイは怪訝な顔をした。

「どういう意味なの？」

「一見、幸せそうに見えるだけで、この国も支配者に思想統制されていて、精神的な自由が無いのは北朝鮮と同じだったこと」

「信じられない」

ムイはもう一度カプセルの中から地上を見下ろした。今度はまるでラスベガスのようなフェイクな街並みに見えているのかもしれない。

「ガムを持ち込んではいけないし、タバコを吸うのも場所によつては罰金刑になる。いまだに鞭打ちの刑もあるし、良いことばかりじゃないよ」

「そうなんだ」

「タクシーの中で権力者の悪口を言つても筒抜けらしいよ。あとで葬りさられる」

「こわい」

「僕らだけでもイメージ優先の観点からさつさと抜け出さないとね」

「本当ね」

ムイは悲しそうに笑った。

僕は地上に降りると、タクシーに乗った。さっきの話を思い出したのか、ムイは車内で一言も口を利かなかつた。

ホテルに着くと、名物男がドアを開いてくれた。フロントでキーをもらつて八階までエレベーターで上がった。

部屋に入ると、ムイは自分のベッドにもぐりこんだ。

「さっきの話を聞いてとても怖くなった」

「だと思つた」

僕は笑つた。

「どうして笑つていられるの？ こわくないの？」

「もう慣れた。感覚がマヒしているんだ」

僕は冷蔵庫からオレンジジュースを二本出すと、一本をムイに手渡した。

「彼氏とは別れたつて言つてたよね」

僕はジュースを一口飲むと、ムイの左腕の紫色の腫れを見て言つた。

「うん。こつちの方は大分良くなつてきた」

ムイはTシャツをめくりあげると、腰の腫れは少し引いていた。ひどい男もいるものである。外見は爽やかな今風の優男なのに。

「お母さんがいなくて、寂しかったんだと思う。きつと、私に甘えていただけ」

ムイは全てを許した顔でそう言つた。この優しさがあつた男の甘えを増長させたのかもしれない。日本にムイを訪ねてきた時は、その片鱗さえ感じさせなかつた。明るくて笑顔の似合ういわゆる雰囲気の良い男だつた。

「達也も楓と別れたつて言つてたよね」

今度はムイが聞いてきた。

「うん。楓は今、中国の大学で日本語の専任講師をやっている。二十年来の夢だつたそう。彼女は僕よりも夢を選んだんだ」

僕は秋田県の大学院の修了式で別れた楓のことを思い出した。グローバル・コミュニケーション専攻のムイと日本語教育専攻の楓は大学院の寮でルームメイトだつた。

色が白く細面で物静かな東北出身の楓と色黒で明るく元気な東南アジア出身のムイはなぜか気が合つた。人間は自分にないものを友達に求めるのかもしれない。

英語教育専攻の僕は、ムイと共通授業で知り合つて、その後、ムイから楓を紹介してもらつた。

上品で古風な何とも言えないなつかしい雰

困気が気に入った。小学校の時の初恋の子がもう一度自分の目の前に現れたような感じだった。

琴を弾いて、和歌を詠み、和服で踊る楓の姿に僕は強く魅かれた。楓に自慢できるだけのものは僕にはなかったけれども、楓は僕と付きあってくれた。

夏には、二人で大学の近くに螢を見に行った。杉の木に鈴なりになった螢は真夏のクリスマスツリーのようだった。

ムイも含めて三人できりたんぼ鍋を食べたこともある。「きりたんぼ」とは、すり潰して焼いたご飯を棒にすりつけたもので、鶏がらスープによくなじんだ。

「アロイ、アロイ」

濃い味が好きなムイはスープの最後の一滴まで味わっていた。

冬には、雪がたくさん降ってキャンパスに積もった。

雪が珍しいムイは、連日のように

「ヒマ、トック。ヒマ、トック」

と浮かれていたが、タイで経験したことのない強烈な寒さに風邪を引いて、楓と僕で看病したこともあった。

楓は大人しいが意志の強い子だった。一度言ったことは二度と変えない鋼のようなメンタルを持っていた。

僕に別れを切り出した時も、楓には凛とした強さがあった。何度もやり直そうとしたのは僕の方で、彼女は一度も僕の方を振りかえることはなかった。

「もう決めたことなので、ごめんなさい。これが私の人生で、こうするしかないの」

彼女の取りつく島のない言葉を思い出してしまった。

「あれから連絡はあった？」

「中国に行ってからはないな。頑固だからね。一度言ったことは撤回しない。とても強い女だよ」

「今になって、達也と別れたことを後悔しているかもしれないよ」

ムイは僕の表情の変化を観察するかのようになそう言った。

「そうかな。『私の辞書には後悔の二文字はない』って言っていたよ」

僕は初めて彼女と飲みに行ったことを思い出した。酒が入ると饒舌になり、どんどん自己開示していつて、圧倒された。

ただ、ムイの言うことにも一理ある。夢が叶っても、そこには現実がある。楓の教えている日本語専科には十五人も日本人講師がいる。

外国にいて一番やっかいなのが、日本人同士の付き合いだ。大学院時代も一人浮いていたし、いつも人間関係で悩んでいたのが、楓が日本人の先輩や同僚と上手くやれているかどうか心配だった。

でも、たとえどんなに後悔しても、自分の決断を変えない女だから、僕の元に戻ってこないだろう。

「楓は戻ってこないと思う」

僕は言った。

「どうして？」

ムイは怪訝そうな顔をした。

「鉄の女だから」

僕が笑うと、ムイも笑った。

「でも、楓は強がっているだけで、弱いところもあるよ」

「そうかい。僕は気づかなかったなあ」

僕はぼんやり窓の外を見つめた。香港ほどではないが、十万ドルくらいの値段がつく夜景だった。

「達也と付きあう前も、一度他の男に振られて、『二度と男の人とは付きあわない』って言っていたんだよ。でも、達也を紹介したら、たつたの二週間で誓いを破っていた」

ムイは呆れたような表情をした。

「そうなの？」

僕は意外な楓の話に驚いた。異性に見せる顔と同性に見せる顔は違うものだ。でも、自分もそうだから、納得した。楓と付き合う前に女に振られて、やけ酒を飲んで、友達の前で同じようなことを言っていたのを思い出した。

「そう。だから、女はわからないよ」

ムイは天井を見つめた。大きなファンが大量の風を送ってくれる。クーラーもついているので、南極にいるくらいに涼しく感じる。

「楓は僕のどこが好きになったか言ってくれた？」

僕はクールな楓には聞けなかった質問をムイにしてみた。

「そう言えば、優しいところって言ったかなあ」

「優しいところ？」

ムイは天井を見ながら、去年のことを思い

出しているかのような形相をした。

「うん。楓が何をやっても、大らかな気持ちで許してくれるところだって言っていたと思う。多分ね」

ムイは美味しそうにオレンジジュースを飲みほした。

「そうか」

僕はムイの言葉に気持ちが熱くなった。理想の男性像を聞いても何も答えなかった楓が僕を好きになった理由をちゃんとムイには伝えてくれていたのが嬉しかった。

「お互いフリーになったんだね」

ムイは意味ありげにそう言った。

「そうだね。海外で、一人ぼっちで暮らしていると、時々寂しくてどうしようもなくなることもあるんだ」

「わかる」

ムイは僕の手を握った。

「わかってくれるんだ」

僕はムイの冷たい手を見つめた。手が冷たい女ほど心は温かかったりするものだ。僕は彼女の手を握り返した。

「私も日本にいる時そうだったから」

「あんなDV男でも離れていると、寂しかったの？」

ムイは一瞬つらそうな表情を見せたが、きつぱりと言い切った。

「ああいう男ほど、女の弱いところを知っている。少しでも一緒にいると離れられなくなる不思議な魔力を持っている」

「そんなものなのか」

僕は休みになるたびに、タイに帰っては身体に傷をつけて日本に戻ってくるムイに同情していたが、実態はそうではなかったのだ。

付きあっている男と女には不思議な絆がある。それは他人には見えないのだ。

「彼のことは忘れられない？」

「もう忘れた」

ムイはあつざりと言った。

「もう忘れたの？」

僕はムイの言い方に楓の冷たさを重ねあわせた。女は一度別れてしまえば、すっかり割り切れてしまうものなのだろうか。

「楓のことは忘れた？」

今度はムイが聞いてきた。

「忘れたいけど忘れられないんだ」

僕はせつない気持ちになった。

「あいかわらず正直ね」

ムイは僕の手を離した。その後は会話もなく、僕らはそれぞれのベッドで眠った。

次の日は朝六時半にチェックアウトした。ムイをタクシーで空港に送った後、僕は午後二時から始まる仕事までオーチャードロードの界隈をあてもなくぶらぶら歩いた。

快晴で時折、爽やかな風が吹いてきて、とても気持ち良かった。

ムイには空港で紙袋を渡した。紙袋の中には今朝空港で彼女にわからないうちに両替しておいた八万バーツの現金と紙片を入れておいた。

紙片には「仕事が嫌になったら辞めな。いつでも来いよ。明るい北朝鮮で待っている。達也」と書いた。

ムイと僕は大学院時代も仲が良く兄妹のような関係だった。彼女が仕事で悩んでいるなら、何か手助けしたいという気持ちだった。

どうせ食費以外にお金を使うこともない。銀行に貯まっていたお金を降ろしただけだった。

携帯電話を何度も見たが、着信履歴もメー

ルもない。まだ中身を見ていないか、あるいは業務に入って忙しいのかもしれない。

僕はホーカーズでラクサという甘辛いローカルヌードルを食べて、甘い緑茶を飲んでしばらく時間を潰していた。

一時間ほどすると、携帯電話が鳴った。

「達也、楓だけだ」

「えっ」

耳を疑った。なんで楓が僕の携帯電話に連絡してきたのだろう。

「ムイから連絡があったの。達也からのメッセージを写真に撮って、メールで送ってくれたの」

「えっ」

ムイが僕のメモを楓に送ったって。

「ありがとう。本当に今辛くて逃げ出したかったの。同じ研究室の日本人の教授にストーリーをされて…」

楓は涙声になっている。見栄っ張りで強がりと言う楓を一番理解していたのは僕だったはずだ。

「楓、こつちに来いよ。シンガポールでも日本語を教える仕事は沢山あるよ。修士も取っ

て、日本語教師の検定にも合格しているんだから」

僕はたまらなくなつてそう言った。やっぱり楓の声を聞くと、会いたくて仕方がない。今も彼女を愛しているのだと実感した。

「ありがとう。今から退職届を出しにいく。それが終わったらそつちに向かう。荷物は後で送る」

楓の心を決めたセリフに胸が熱くなった。

思いついたらすぐに実行する。楓らしかった。

僕がもし直接彼女に何か言っていたら、こうはならなかっただろう。ムイの上手なアシストのおかげだった。

「わかった。着いたら電話してよ。待っているよ」

「そつちで仕事見つかるまで宜しくお願いします」

楓の珍しいくらいの丁寧な言葉に照れくさくなった。

「そんなにあらたまるなよ。気楽においで」

「ありがとう。今までごめんなさい。また、連絡する」

大きな誤解が生じたようだった。でも、その誤解が大きな奇跡を呼んだ。ムイのおかげだった。

そして、ムイからメールがあった。

「楓から先日メールがあった。楓は達也とよりを戻したいと思っている。今回会って達也に楓のことを伝えようとした。

でも、私も達也が好きだったから、言えなかった。おわびに私が達也からもらったメモを写真に撮って楓に送った。多分、後で楓から連絡があると思う。

「いつかお金は返すよ。本当にありがとう」

今日もジャンボでチリクラブだ。僕は早速予約の電話を入れた。そして、ムイにサンキユーメールを送った。

僕はマライオンの耳の修理代も払ってやりたいくらい気分よく、予備校までの道を颯爽と歩いて行った。

グリーン賞 特別なあなたと、 何回もデートの夢を見る

仙北市 田 口 奈央子

仮の恋人始めました

「ご予約ありがとうございます！コースをお選びください」

ついにやってしまった。二十六歳OLの私はとても勇気を出して頑張っている。インターネットの広告で見つけた「一日デート体験しませんか？」という文面に誘われて、仕事で疲れ切った私は空っぽの頭でアプリをインストールして「仮の恋人」と一日デートすることを決断してしまった。

「一時間コースでお願いします」

「かしこまりました！では、当日に恋人になる女の子のラインとなります！返信をするまでお時間を頂く場合がございますが、ご了承ください」

指名した女の子のラインを受け取り、私は早速メッセージを送った。

「初めまして。今回指名させていただいた結花と申します。一時間コースで予約をお願いします」

もう、やばいかもしれない。謎の罪悪感と楽しみが胸を押し潰そうとしている。バクバクと鳴る心臓は、通知音でもっと加速した。

「初めまして！ミスミと言います。この度はご指名ありがとうございます。一時間コースでございますね。どこに行きたいとありますか？」

「行きたい場所は、特に決まってません。お手数ではありますが、ミスミさんにお任せしてもいいですか？」

「かしこまりました！では、待ち合わせ場所の指定をお願いします」
待ち合わせ場所ってどこがいいんだろう。定番は駅だよな。

「川風が気持ちいいですね」

なんで住んでいるアパートの近くにしちゃったんだろう。川風もこの秋には寒いし、全くとおしやれじゃない。それに、こんなに可愛い子が似合う場所じゃない。

「ごめんなさい。待ち合わせ場所をこんなと

ころにしちゃって」

「構いませんよ。それに、ここって夜になると向こう側にある観覧車がライトアップされて綺麗ですよね」

夜限定ですけどね。まさか、こんなに可愛い子に当たるとは思わなかった。顔写真は一応見たけれど、現実と写真は全く違う。

「結花さんがアプリに登録されていたプロフィール拝見しました。インドア派なんですね」

「はい。アウトドア系はめっぽう苦手です。休日も家で過ごすことが多いんです」

「じゃあ、少し散歩しましょう」

え？散歩って、散歩で一時間終わるよ？大丈夫？詐欺じゃないよね。

「まずはお互いを知りましょうよ。そこからデートは始まるんです」

明るい笑顔に何も言えなくなつて、私は言われるがまま歩き始めた。

「結花さんのセクシユアリティはなんですか？私はバイです。男性も女性も好きです」いきなり際どい質問するな、この人。

「私はレズです。今まで、女性としか付き合ったことはありません」

「そうなんです。結構惚れっぽい性格ですか？」

「多分そうだと思います。一目惚れで付き合ってる人が多いので」

「私も惚れっぽいんです。同じですね」

十年前に法律が改正されて、同性愛者の結婚がようやく認められた。改正後すぐは、まだ冷たい目で見られることが多かった。私もレズビアンというセクシュアリティと一緒に生きていくから、気持ち悪いと言われたこともあるし、いじめられたこともある。今はだいぶ減って、理解が広まったと思うが、やはり全員の理解を得るのは難しい。同性愛者もいけば異性愛者もいる。二分に分ける方がおかしいが、どちらの理解もあつてこそ壁は初めてなくなる。法改正をしたことよつて、一度全てを受け入れろと無理強いのような行動をした組織があつた。でも、その組織のせいでまたたくさんの非難が飛び交つて、関係のない私たちにまで飛び火したことがある。好きに生きるだけであーだこーだ言われる世の中が苦しくて、自殺者が急激に増えた年もあつた。

「今回、ご利用いただいた理由をお聞きして

もいいですか？」

「仕事に疲れてしまつて。六年前に恋人がいたんですが、それ以来出会いもなく。ならいつそ、嘘でもいいからデートして疲れても飛ばそうと思つたんです。ほぼ無意識のうちにアプリとかダウンロードしました」

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

そんな最悪な年を乗り越えて分かつたことがある。自分を曝け出すのは、他人から求められた時だけでいいんだつて私は思つた。今はいろんな形で恋人を作ることができる。無理をしてつらくなるのは自分だと、何年前にやつと気がついた。

「ミスミさんは、誰かとお付き合いされたことはあるんですか？」

「はい、ありますよ。でも半年くらいでみんな別れました。結花さんは長くてどれくらい付き合つてたんですか？」

「長くて二年ですね。一番好きな人とも二年しか持ちませんでした」

「一番好きだつたんですね」

「はい」

「それじゃあ今日からは、私が一番の恋人に

なります」

「……はい？」

「私をずつと指名してください。私は貴女を惚れさせる自信があります。頑張りますね！」

ミスミさんが私に向けた笑顔はとても優しくつたし自信に溢れてた。

「よろしく願ひします」

疲れを吹っ飛ばすには、彼女の存在は大きいものになるかもしれない。少しの期待を膨らませて、私はミスミさんの隣で背伸びをして歩いてみた。

特別なあなた

「ミスミさん！」

今日は結花さんとデートの日。これで三回目のデートになるけど、明るくなつてくれて嬉しい。一番初めに会つた時は、疲れのせいで暗い雰囲気だつたから正直不安だつた。「私は貴女を惚れさせる自信があります」つて自信満々に言つてよかつた。結花さんから三回も指名をいただいた。

「お母さんにも会いたい」

高一で亡くした母への悲しみと寂しさを紛らわすためには、一人で生きていくつていうのが一番いい手段だと思つてたけど、一人も一人なりにいい時と悪い時がある。

「早く事務所に帰らなきゃ」

これでも売り上げZO.2の私だから、今は泣きながら頑張らなければいけない。時間確認のためにスマホを見ると、結花さんからメッセージが来ていた。

「今日はありがとう。しばらくは仕事が忙しくて予約入れられないかもしれません。ごめんね。ミスミさんも体調に気をつけて頑張れ！」

あー、もう！こんなに優しいお客さんはいないんだつてば！

「がんばるぞ、ミスミ」

結花さんも仕事で忙しいなら、私もとことん頑張つてやる。

誰かを好きになること

「ミスミ？大丈夫？」

マネージャーから心配の言葉をかけられても、生ぬるい返事しかできない。結花さんのデートからもう半年も経っている。仕事が忙しいからとは聞いたけれど、こんなに会えないとは思わなかった。この半年間で、私は結花さんのことを何度考えた？何度好きと認めて、何度好きじゃないと否定した？私は結花さんが好き。これが半年間迷つて、迷つて、迷つた結果だ。会えない時間に募つた気持ちは「大好き」だけだった。

「最近、ミスミのお客さんから心配の電話が多いの。体調が悪いなら無理しちゃダメよ」
こんなに落ち込むとは思わなかった心が、普段の仕事に影響を与えている。

「それと、ミスミの新しい所属先の店舗が新宿に決まったから、近いうちに店長に挨拶に行つておいで」

「りよーかいです」

私が勤めてる会社は東京を拠点として、その周辺に何店舗か支店がある。私は秋葉原にある支店に出勤しているけれど、ここ数年秋葉原店の売上が下がっているのが原因で、あと一ヶ月で閉店となる。この店舗で働いている私たちは、他の支店や本店に異動することが

決まっている。私も例外ではない。新宿店への異動は閉店が伝えられた一週間後にほぼ決まっていた。

「社長からの提案でね、お客さんを次の店舗でも引き継いでもらえるんだけど、どうする？他の子たちはほとんどそうしているけど」

新宿店でもお客さんを引き継ぐことができれば、今まで上げた売上もそのまま継続される。新宿店でお客さんもすべてリセットすれば、売上からもらえる給料は今より格段に低くなる。でも、私はお客さんを引き継がない選択をした。

「本当にいいの？苦勞して積み上げたものが崩れるよ？」

マネージャーとは何度も話し合いをして説得してもらつたけど、私は意見を変えなかった。そして店長にも頼み込んで、異動先の情報を公開しない方向で了承してもらつた。

「なんでそこまでするの？」

周りの子たちとは違う判断をどんどんと下していく私に、マネージャーは神妙な面持ちで聞いた。

「怒らないで聞いてくれる？」

私はマネージャーだけに理由を話した。私がお客さんの一人を好きになつて少しおかしくなつてたこと。この仕事を続けるなら苦勞を承知で始めをつけなければいけないと思つたこと。私が結花さんとの時間を優先しようとしていたこと。マネージャーは何も言わずに、ただ黙つて私の話を聞いてくれた。中卒の私を雇ってくれるお店はここしかないと思つてる。だから、私なりのけじめをつけて仕事に向き合う。今更まともな道は望んでない。今まで自由にやつてきた分、ここで頑張りたい。

「分かった。ミスミがそこまで覚悟を決めるなら、私はもう何も言わない」

「ありがとね」

誰かを好きになること。それは悪いことではないけれど、今の私は恋を怖がつている気がする。臆病なままこの仕事は続けてられない。

「ちゃんと、その好きな人を振つてきてね」

優しい笑みで頭を撫でてくれたマネージャーには迷惑をかけるけど、あと一ヶ月よろしくね。

「ごめんね、結花さん」

私の勝手にたくさんのお客さんを悲しませてしまう。私が悲しませたくないなかつた結花さんまでも。私は私のためにこんな決断をしたから、どうかたくさんの人に恨んでほしいと思つた。

可愛いスタンプ

ミスミさんとの最後のデートから半年と少し経つた。土日出勤をしなければ対応できない仕事ばかり回されて、毎日クタクタになつて帰つてきている。ミスミさんとのメッセージのやりとりがこんなになつて続かなかつたこともなくて元気が出ない。過去のメッセージ履歴を遡つて、彼女との思い出を思い出した。

「可愛い」

ミスミさんから送られてくるスタンプはすごく可愛い。ぶくつとしたイラストのキツネがミスミさんっぽくて、私はこのスタンプが気に入らだ。六年前、こんなふう可愛いスタンプを使う人と付き合つてた。

「このスタンプ可愛いでしょ？」

「真希さんって、こういう可愛い好きな

の？」

「んー、別に。ただ結花が喜ぶかなつて思つて」

「真希さんってそんなに優しくなつたっけ？」

「優しく困るでしょ」

「優しく怖いかな」

その時の恋人はお姉さんって感じの人だった。当時の私より四つ年上で、とても頼り甲斐のある人だつたけれど、結局二年付き合つて別れちゃつたな。振つたのはどつちだったっけ？

「私さ、やりたいことができたから海外行く」

真希さんが海外に行くつて言つて、遠距離は私も真希さんも耐えられないから別れようつて話になつたんだ。もしもあの時、私が海外に行く真希さんときちんと話し合せてたなら、今も続いてたのかな？真希さんは「結花が泣いて行かないでつて私を止めるなら、海外に行くのは一旦保留にするけど、どうする？それとも一緒にいてくる？」つて聞いたけど、私の答えは「真希さんを海外に行かせたい」だった。よくよく考えてみれば、あの決断力もあつて優しい真希さんが、自分の

人生を変えるかもしれないチャンスを探るがした発言は真希さんらしくないことに気がついた。大切な人生の選択肢を、自分だけで選ばなかったのはなぜだったんだろう。

「本当に泣いて縋らなくてもいいの？もう二度と、会えないよ」

生きていけば、またどこかで会える。それが真希さんの座右の銘だった。それなのに、はつきりと自分の意見を捻じ曲げる発言に私は悲しくなったのを覚えている。

「生きてれば、また会えるよ」

真希さんがどうして念を押すように私に行ってもいいのかと聞いたのか、どうして自分の意見を曲げたのか。私の中でもその答えが出ていないのは、私が真希さんの人生に深く関わろうとしていなかった証拠だ。真希さんを止めることで、それが真希さんにとって重い足枷になるのを避けたかった。真希さんは私の本音を聞こうとしたのに、私はどこまでも嘘を貫き通した。

「結花。次に出会う恋人の前では、素直になっ
てね」

大きくて細い手が私の頭を撫でた時に、私は真希さんを悲しませてしまったんだと後悔し

た。その日からは心の中がでんでこ舞いだった。募った後悔は意外にも深く私の心をついて、真希さんを思い出す度に大泣きしていた。本当に大変だったなあって思う。真希さんごめんねって、面と向かって言う機会が欲しくてたまらなかった。

「あーあ！真希さんに会いたい！」

どこで何をしているんだろう。元気に過ごしているのかな。新しい恋人はできたのかな？真希さんは目尻のちよつと下のホクロがセクシーだったから、新しい恋人はそれに気づいたかな？

「私、このホクロがチャームポイントなんです」

確か、ミスミさんも真希さんと同じ場所にホクロがあつた。

「偶然って、重なるんだなあ」

ソファから動かない体を持ち上げて、制服という名の囚人服をハンガーにかけた。ピロンとメッセージの通知音が聞こえて、会社からだったら嫌だなと思いつつも無意識にスマホを手持してしまった。流れるようにメッセージを開くと、画面には「秋葉原店、閉店のお知らせ」と送られていた。疲れて働かな

くなった頭でも、メッセージの意味は理解できた。目をかつびらいて長文を凝視した。内容は営業不振による閉店に伴い、秋葉原店に勤務しているキャストを他の支店へ異動させるというものだった。「詳しくは本社のホームページよりご覧ください」と添付された会社のホームページをタップすると、各キャストの異動先やお客様引き継ぎの内容が掲載されていた。私は必死にミスミさんを探した。

「あつた！」

下にスクロールしてやっと出てきた彼女の顔写真の下には、「本人の強い希望により、異動先の掲載は控えさせていただきます。またお客様の引き継ぎはいたしません」と説明があつた。

「何も情報を公開しないの？」

他のキャストたちとは違う対応に混乱した。私はどうしてもその事情が聞きたくてミスミさんのメッセージを開くと、新着メッセージが同時に送られてきた。

「お仕事終わりましたか？日付が変わるまで初デートの待ち合わせ場所で待っているの
で、暇があつたらきてほしいです」

私は脱ぎかけたワイシャツのボタンを急いで

閉めて、家を駆け出した。

恋人と呼び合えたならば

「ミスミさん！」

息を切らして再びあの場所に戻ってきた。

「早かったですね！もつと待つかと思つてた」

「異動先を公開しないのはなぜですか!？」

ろくな挨拶もなしにぶつけた質問に、ミスミさんは小さく微笑んで

「諦めるためです」と答えた。

「諦めるためつて、何を……」

私はアナタの寂しそうな表情を見ても、自分の疑問の答えを聞くことに精一杯だった。アナタがなぜこのやり方を選んだのか知りたかった。ミスミさん、お願いします。教えてください。私はアナタとの空白を作つたまま離れるなんて嫌です。

「結花さん。怒らないで聞いてくれますか？」

真剣な顔で私を見つめるアナタに、揺るがない覚悟を見た気がした。

「私は貴女が好きです。これは、ビジネスの意味じゃなくて、本当に好きなんです」

ビジネスじゃなくて、好きなんですという言葉に、今のアナタがいつぱい込められている。見たことのない表情が、言葉に強い意味を持たせていると分かったから。今まで、可愛い顔で溢れる笑顔を見せてくれたアナタが当たり前だと思つていたけれど、そんなに切なくてきれいな顔もできるんだね。

「お店の規則でね、もし誰かと付き合うならお店をやめなきゃいけないの。でも、私はまだこの仕事をやめられない。ここで死ぬ気で頑張らなきゃ、未来の私に投資できないの」

アナタが私を見つめる目には、迷いがなくて、私はどうすればいいのか分からなくなつた。アナタをここで失えば、私の日常がキラキラと輝く日常はなくなるんだろうな。それを失いたくないからアナタと離れたくない。でも、アナタを止める力は私にはない。

「日付が変われば私たちはもう他人になるけど、結花さんはどう生きる?」

私の心が弱いのを知っているくせに、こんなに酷い選択を与えるアナタは小悪魔だよ。

愛は言つたもん勝ち

夜にこの悲しみを溶かしてしまいたいくらい耐えられなくなつてきた。

「私は寂しさを忘れたくてこんなこととしてたけど、軽蔑しなかつたのは貴女だけだったよ」

何を言つても言わなくても、アナタが私から離れる覚悟を揺るがすことはできないんだろ。うな。そんなに切ない顔をしてても、アナタは絶対に泣かないんだね。私はこれからどうやつてアナタを忘れよう?

「アハハ。泣き顔が似合わない人は初めてだよ」

どうしてアナタは笑つていられるんだろう。ずっと笑顔で、疲れないのかな。私はアナタとのデートでも何回かため息をついてつまらなそうな顔をしたけれど、アナタはずっと笑顔だったからつられて意識せず笑顔になる回数が増えたの。なんで、こんなに涙が止まらないんだろうね?私はアナタが好きだから、お別れがいつも辛かった。今までは約束すれば会えたけど、今夜それぞれの家に帰つて日

付が変われば、約束をしても会えないんだよね。私とアナタの偶然が再び手を繋がないければ、もうアナタと会えないんだよね。

「結花さん？」

アナタが好きでたまらない。一緒にいるだけで幸せだった。

「いつまで泣いているの？」

差し伸ばされた細い手は、私の頬を滝のように流れる涙を拭う。綺麗なネイルが汚れるよと心配したけれど、もうしばらくこのままでいたくて余計涙が溢れた。

「結花さん。私と目を合わせよう？」

汚い顔をあげて、ようやくアナタの顔が視界に入った時、私は驚いた。

「もらい泣きしちゃった」

一生見ることはないと思っていたアナタの涙が、大きな瞳からたくさん溢れてた。泣き顔すら可愛いって、ある意味奇跡だよ。

「私ね、結花さんのこと忘れないよ。だからさ、結花さんも私を忘れないで。そして、私たちは私たちの知らないところで幸せになるう」

嗚咽しか出来ない私はなんて情けない。アナタはこんなに頑張って想いを伝えているのに。

「もうバイバイしよう。これ以上一緒にいれば、私も貴女を忘れられなくて明日の恋人と向き合えないから」

このまま二人で、この大都会の隅っこに逃げていきたい。

「結花さん。貴女から私の手が離れたら、もうお別れね」

ああ、離れてしまう。好きって伝えなきゃ。最後くらい、きちんと言わなければ後悔はまた募る。

「じゃあね」

心地いい温度が離れて頬に溶けていく。泣きながら、それでも笑顔が輝く大好きなアナタが背を向けて歩いていく。夜風に吹かれて靡く綺麗な黒髪が辛い。またはつきりと想いを伝えられなくて、アナタを傷つけてしまったと思う。

「好きだよー！！！」

面と向かって言えばいいのに、私は臆病すぎるからいつまでも前に進めない。夜空に叫んだ「好き」が星になつてしまう前に、アナタにきちんと届けばいいなって、今更な本音を胸にしまつて唇を噛んだ。走り出す気持ちを抑えるように体を強くかがませて一気に伸び

た。

「頑張れ！ミスミーーーー！！」

もう何かに後ろ髪を引っ張られるのは終わりで。私は私でちゃんと生きていく。恋愛に鈍感でも生きていく！ポブを夜風に靡かせて、溢れる涙を堪えて、私の足は未来に向かって歩いていった。

「そういう愛ある言葉はね、直接言ったもん勝ちなんだよ」

貴女が弱いと知っていたから、私も後ろを振り向かなかつた。貴女の泣き声が夜空に浮かんで大きな星にでもなっていたら、私はその星を掴んで飲み干して、貴女でお腹をいっぱいにして眠りたい。手を伸ばして見上げた夜空には、今までに見たことのないくらい大きな星が輝いていた。

詩

一詩

最優秀賞 ソラプチの春

井川町 小林 康子

白樺の林に

沿うように流れている

ソラプチ川

ここは南富良野

北の大地のまん中

水仙がそろそろと伸び

汚れた雪をかきわけ

水芭蕉が咲いている

きつねが振り返りながら

道を横切る

遠くの十勝岳が時折噴煙をあげる

アイヌ語でソラプチ川という

空知川

流れは川の中の大岩にぶつかり

ふたつに割れ

背後でまたひとつになる

生き物のように躍動し

水中をうねるように

気泡が舞い

今を引き連れていく

名もない川を

ソラプチと名付けたみんなは

どこに行つたのだろう

どこかで

長い留守番をしているのだろうか

過ぎた時への郷愁が寄り合う

どこかで

コテージのハンモックに揺られ

川の音を聞く

白い雲がゆつたりと流れ

人の声も鳥の鳴き声もない

つかの間のソラプチの春

色とりどりのカヌーで賑わう季節には

まだ間がある

今 荒ぶる水は煌めき

空を抱いて

流れていく

私を揺らし

流れていく

奨励賞 夏至の汗

にかほ市 鈴木敏男

父が

丸い空から青草を落とす

祖父と俺はその草を踏んだ

サイロの中で

幾度もいくども踏んだ

汗びっしょりになって踏んだ

サイロから出ると

父が言った

草々に隙間を作らないためだ

良質なサイレージを作るために

踏み込む以外にないことを…

農協では

米＋アルファの収入を得る手段に

乳牛の導入を勧めた

父は

その計画に賛同した

夢に向かつて燃えていた

帰還して十余年

仕事に燃えるしかできなかった時代だったの

か

今はもうそのサイロもない

びっしょりの汗は地に消えた

記憶さえあわくなつて来た

父の面影も…また

牛馬からほどなく普及した

耕運機の導入も始まり

それに草を積んで来ては

サイロに入れた

暑い盛りのサイレージ作り

小五の俺の力では

何の力になつただろう

それでも

夢を作り上げるためには

情熱と根気と

俺の些細な力も必要だったのか

サイロにあふれるばかりに

汗して、終日

草を踏んだ

暑い夏至の日。

奨励賞 多過ぎる余白

鹿角市 金 万 和

これが三月の空なのだろうか
何も見えない灰色の空が広がる

野辺送りの村人達の列

角巻きで顔を覆う程の季節外れの吹雪

五十七歳の母と十七歳の私を引き離すには

あれくらいの吹雪が

必要だったのかも知れない

「私なら大丈夫だよ…」

そんな強気な嘘は言いたくなかった

木製の棺が真っ白い雪衣を被る

雪の群舞は意を決するように

上空に

勢いよく舞い上がったかと思うと

戸惑うように右往左往しながら

舞い戻ってくる

七人の産声と巡り合った母としての

感動と無念さが天空を彷徨う

「心配しなくていいよ…」

そんな思いやりのある嘘を言う

ゆとりもなかった

あの吹雪は母の歩いた五十七年間の

最後の悪路の軌跡だったのか

それとも 二度と母の匂いに

触れることの出来ない現実を

知った私の心象風景だったのか

「産んでくれてありがとう…」

そんな気の利いた言葉も言えなかった

たった十七年間の母と私の

隙間だらけのキャンバス

所所 色彩豊かに塗り潰されてはいる

盆花採りに行った近くの

野山の風波の音

祭りの夜皆で数えた手の届きそうな

満点の星の美しさ それ故の怖さ

夜業よなごをして縫ってくれたアヤメの

花模様の祭りの浴衣

多過ぎる母と私の余白は唯

少女の頃の有らん限りの

レクイエムだけで埋まった

半世紀以上の私の

鎮魂歌が聞こえる

入選 畑ものがたり

由利本荘市 豊 島 カヨ子

真正面に 鳥海山をのぞむ畑のまん中

カブのうねのとなり

チンゲンサイが植えられた

「カブくん おそくなってごめんよ」

「やあ チンゲンくん 待ってたよ」

「種まきは一緒だったのに」

きみは芽を出すのが早かったね」

「そうだよ よおし これからは

よーいどんで 大きくなろうね」

さやさや吹く風は きもちいい

ゆうらゆら ゆれてうたたねをする

ピューピューの風が吹いたら

しつかり土にしがみつ

しとしと雨が しみ込む日には

根っこを広げて 吸い込むんだ

お日さまのぬくみをいっぱい浴びて

星空の下で ちよつぴりずつ

大きくなっていくよ

カブくんは ギザギザ葉っぱを広げ

根元が小さな まんまるに

チンゲンくんの青い葉っぱの下は

白い茎がくんねりと重なりあつていく

ナスの小花が 紫の実に

サツマイモはにゆるにゆるつるのばし

ジャガイモはこんもり みどりの森

おしりに黄花のキュウリの赤ちゃん

ネギは 土よせするたびに 背のびする

いつの間にか仲間がふえて

畑は ともにぎやかになった

ある朝

シロツメ草をふむ かるやかな足音

「ねえ いよいよだねチンゲンくん」

「うん きつとボクの方が早いね」

「キミの立ちすがた 格好いいね」

「野球ボールに似たキミもステキだ」

「ぼくたち おいしくなれたかな」

「もちろん おいしくなってるよ」

お日さま もうすぐ顔をのぞかせる

鳥海山は 今日も

まつすぐ みんなを見つめている

入選 たぶん、私の未来

秋田市 原 田 さゆり

初めて目を開けたら
まぶしくて

何も見えなかった

でもあなたの

吐息が聞こえた

初めて息をしたとき

私は

声をあげた

あなたの手の

ぬくもりを

感じながら

海の音が聞こえなくて

もう二度と

戻れないことを

さとした

野いちごを採る
あなたの手

しわと血管の浮きが

私の手と

そっくりで

思い出した

あなたの顔は

笑っていた

辛い時も

悲しい時も

もう一回

会うことは

できるかな

もう生まれ変わって

いるのかも

それでもあなたは

私の心の中で

生き続ける

あなたがどんなに

酷くても

優しくても

私の母であることだけは
間違いない

永遠に目を閉じた

夢の中で

ありがとう

さようなら

グローム賞 Revenir

能代市 大塚 莉々

この非日常で美しい夢舞台を！

年を重ねれば消えてしまう儂い思い出が、
今この瞬間で一番輝いているなんて。

幕が上がって

最初の一步を踏み出した。

コッコツとトウシューズの音に吞まれて、

沈黙がスカートに触れて溶けていった。

音楽が流れ始めた。

観客は舞台に釘付け。

彼らは待っている。

私の魔法にかけられる準備は出来ている。

昨日のことのように覚えてる。

初めて履いた真つ赤なバレエシューズ

先生が私だけにくれたシュークリーム

後輩にどんどん追い抜かれて泣き腫らした夜

すべてが、すべてが輝いていた。

まだ咲くまでの時間があってもいい

まだ十分に熟れてなくてもいい

ここで大きな花を咲かせたいの！

もつともつと羽ばたいていきたいの！

いつか白鳥のように夢を掴みたいの！

普通の高校生だった日常は、ただ一人

スポットライトに照らされたステージへ。

「変貌」

不思議と緊張はしていなくて、

嬉しさと涙が出そうになる。

ああ私はこんなにも待ちわびていたのか、

グリーン賞 隣の蒼い君へ

能代市 佐藤 愛

この蒼い空はどこまで続いていくのだろうか
あの蒼い鳥はどこまで翔け上がるのだろうか
追いつきたくて追いかけてたくて

まるで静かな恋のように

黄昏の空に宵螢が飛んでいる

暝色に反射する夕顔のように

蒼い鳥はほほ笑んだ

慈しみと妬み

玉石混合

溜まって積もって蒼色に染まった

頬を伝う雫

ねえ

また笑えるよねって

声にならない

届かない

叶わない声で

いつかあの蒼い鳥に

グリーン賞 815

瀧上市 金乃華穂

ギャン

痩せこけた犬が此方を見つめている

底のない瞳で私を狙っている

何処までも追いつづけ

何も選ばない私をせめ立てる

駆け抜けた先

足下には、かみなり

ドンッ

感じたのは体液

なま温かい、肉のかたまり

壁に描かれた「NO」という声

誰かが残した警告も

掠れて、歪んで、聞こえない

ペタ：

近付いてくるのは、あの犬の足音だろうか

振り返った先

上空には、せんこう

ドンッ

残ったのは土塊つちくわ

なま温かい、人のぎんぞう

ギャン

負け犬のお吠えが聞こえる

惨めな両足が転がり

ひらいた胎内が此方を見つめている

生き残った私をせめ立てる

見上げた先

頭上には、こくえん

ワンッ

分かったのは涙

なま温かい、鉄のかたまり

喉が渴いた：

喉が渴いた：

ああ、君もいつのまにか死んでいたね。

短

歌

短歌

最優秀賞 ラムネの瓶

能代市 工藤美咲

適温の待合室で甲子園中継を見た 三者三振

「いなくなりたい」とつぶやく本音でも嘘でもなくて自傷のように

「笑顔には上手も下手もないじゃない」「そうだね（きみは器用ね）

ごめん」

ちようにどいい不幸はどこかきもちいいそりや幸せになれないわけだ

ラムネの瓶みたいだずつと胸にある違和感を吐くこともできない

現状の維持ができたなら、生きてたら、上出来だから、だから、だまつて

雲のない青空がちゃんと嬉しくて大丈夫まだわたし、まともだ

奨励賞 小さな子のおい

秋田市 加藤厚子

幼子はほわんほわんと匂いするおしゃべりしながら添い寝する夜

「おしよゆの場所どこですか」と涙声黄色い帽子の小さなお客

画用紙に描きたる線はバナナにもお花にもなる幼の絵かき

「ただいま」とピンクの傘が駆けて来るびしょびしょの手で抱きつい

てくる

熱々のスープをゆつくり飲むように子の一日を手を止めて聞く

夕食に手先器用な少年はワントンの皮上手に寄せる

フィナーレの花火打ち上げ少年の高校最後の祭りは終わる

奨励賞 日々片々

横手市 森田 溥

家の回りの囲ひを外し雪深き憂ひの晴るる思ひにひたる

南天の赤き実に寄るひよどりの番ひを見つつ春をことほぐ

芽吹きの前葡萄畑の静けさにひたりて細き草道歩む

蓮華つつじの花の真盛り見上げつつ青の極まる空に吸はるる

雨降れば雨に生き生き日が照れば日に輝きて紫陽花の咲く

玄関に入れば薔薇と芍薬を妻の活けをり匂ひほのかに

新しきすだれを買ひて厨辺の窓をおほひぬ日差し強まり

奨励賞 明日に向かひて

秋田市 佐々木 鏡子

路上にて転びし瞬間もうろうと起こりしことのしかと判らず
「救急車呼びませう」とふ声のして大事を知る動けぬ吾は
手際よく手配しくれし人の名を知らねどその顔いく度浮かび来
寝たきりの躰となりふつと甦る痛みに堪へるし母の姿が
太ももに人工骨の納まりてしかと歩まむ明日に向かひて
歩く日を想ひて娘の選りくれし運動靴にてリハビリ始む
誰も彼も犬つれ歩む朝の道われはお朋に歩行車押しゆく

入選 合唱コンクール

秋田市 鈴木 修一

なじみ来し緞帳といふ隔てなき素の舞台へと心を馳せぬ
この海によみがへり来る夏ありと君らは歌ふ白波の列
信つよく生きよと迫る歌声よ繕へる信あばくごとくに
正解の定まる間に倦みたりと謳ふ自由に吾も声を添ふ
偽らず瞳はぬれて歌ふかなひとり立ちする別れの空へ
弾きをさめゆく伴奏の静寂の波紋ひろがり拍手の湧けり
迷ひなきフォルティシモなり葭切の声ひびく葦まぶしく見つむ

入選 新盆

東京都江東区(秋田市出身) 三浦 真貴

花束の三つを五つに組み直す小菊のあおい匂いのなかで
玄関は西陽にうすく浸されて花鉢ごと両手を濡らす
もう誰が眠っているかわからない五つの墓にでも手を合わす
少し死に近付いたせい夕暮れのお墓参りのあとの気怠さ
迎え火の存外つよく燃えてゆく生者も死者もあかるい方へ
とろんこをからから揺らす夜の風思い出にまだならない記憶
祖母は今おそらく叔父のとこだろう盆堤灯はまわり続ける

入選 反芻の旅

秋田市 柴田 敦子

地図が好き時刻表好き旅が好き時間と景色陸路楽しむ
車窓からツツジ アジサイ ヒマワリと季節移ろう列島長し
早朝の静寂広がる伊勢神宮カラスの声も清らかに聞こゆ
内宮の新人ガイドは楽しげに小ネタ交えて語り滑らか
「学文路」という難読地名メモをして誰に話そうこれもお土産
高野山豪雨の爪痕残る道地蔵の泥を拭う人あり
旅を終え経路見た物食べた物思い出たどり反芻の旅

入選 独り言

鹿角市 高田勝彦

朝記す日記で試す記憶力時に戸惑う不埒な記号

たたら踏む「たまにやあるさ」と嘯けどはや調律のきかないピアノ

逝きてみな善人だった友偲び歎異抄読む吾は悪人

何ほどのこともあらんと覗き見る「中学自習室」手に負えず

教え子の今朝も欠けたるアルバムに俺より先に逝くなど怒鳴る

「もういいかい」呼べば夕陽の彼方より「まあだだよ」と母の声する

ほろほろと汝忘れゆく妻の手を引いて渡らん鵲の橋

入選 産土ことば

横手市 佐々木ヨリ子

黙禱を三十九名に先づ捧げ三年遅れの傘寿の集ひ

敬語なく産土ことばに盛りあがり中学生の頃のあかるさ

砂利道を揚々歩みし百二十名初の遠足「おもしろかったな」

「か^いし^えで^なや」誰かつぶやく 遠く住む友らに紫紺のこの茄子漬を

靴下を片足立ちにするり履かかつてのエース農に日焼けす

B29夜毎唸りき 一頻りわれら四歳児の恐怖を語る

この先の出会ひ叶ふを疑はず「し^えば^な」 「またな」と手を振り合へり

入選 幸せなひととき

北秋田市 成田洋子

お魚何が好きかときくけれど答えはいつも唐揚げ食べたい

気合い入れ作りすぎたよお弁当買うの忘れたノンアルコール

スーパーでかごを片手に手をつなぎ夫婦に見える？何に見える？

お決まりの味噌ラーメンを食べたあと帰したくないコンビニ寄ろう

少しだけもう少しだけ下さいな二人の時間二人の居場所

次にいつ会えるのかとはきけなくて空いたグラスをじつと見つめる

あなたとの夕べの会話を思い出し優しくなれる渋滞の中でも

グリーン賞 青春のカタチ

潟上市 高橋美咲子

二度寝した遅刻だ遅刻早よ走れあ、忘れ物ゲームオーバー

合唱祭間近みんなの鼻歌が聞こえるような増えるような

「また明日。」夕日に伸びる君の影隣に私の影があつたら

悔し泣きそれがあなたの強みだと見ていてくれた本当の友

「ありがとう」泣いちやうじゃんか笑うなよちゃんと青春してんだ俺

振り向けば僕の不安な足どりに大丈夫だと恩師は笑う

何度でも振り返っては手を振って恩師の笑顔見えなくなるまで

グリーン賞 感慨に耽る

仙北市 赤倉聖来

「また一緒に住みたいね」と母が言う実は私も思っているのに
外出ると遣らずの雨かいや違うただ私が雨女なだけ
日曜日寂しき隠して部屋帰り離れて気づく母の暖かさ
不安積む新生活に慣れた頃ふと食べたくなる家のご飯
七歳に戻る魔法のオムライスケチャップで母が書く私の名
「ス」に戻りたいと思う日々高校の時と矛盾している
将来を心に決めたあの日からたかが一年されど一年

俳
句

俳句

最優秀賞 日記の余白

秋田市 大橋 風太

今年また写真の妻と花の旅
添ひし日は褪せることなし二輪草
薔薇を剪る妻の遺愛の花鋏
亡き妻の椅子も並べて夕牡丹
妻の声聞こえるやうな星月夜
亡き妻の日記の余白秋深む
語りつつ落葉手で掃く妻の墓

奨励賞

晋山法要 しんざんほうよう

湯沢市 加瀬谷 敏子

法螺の音の響く法要寺日永
今なほもいはれ息づく山桜
問答に応ふ青年目の涼し
寺を守る水辺の柵や水芭蕉
夕立や奥の暗がり羅漢像
一村の音のかすかや清水湧く
野ざらしや読経のさまに蝉時雨

奨励賞 いのちの楽園

秋田市 鈴木 修一

夏旺んペンギン舎より潮の香
撒水の驟雨かぶれるエミューの眼
立ち並ぶ美脚の夏よフラミンゴ
涼風やオルゴール曲慰霊めき
アイス舐め耳そよぐ象独り占め
児に迫るきりんの貌よ雲の峰
チンパンジーと顔突き合わせ夏見舞

奨励賞 城跡散策

大潟村 田村 陽子

中土橋蟻の大軍渡り切る
ぬつと出て猛者の風体いぼむしり
散策や昔を語る苔の花
隅櫓巢を張る蜘蛛の忍者めく
木洩れ陽やあきつを肩に藩主の像
空映す千の水玉千の蓮
守る人ありて久保田の秋麗

入選 縄文土偶寸描

横手市 山崎 勝重

遙けしや縄文土偶映えし夏
玻璃ごしの土偶は端坐夏極む
豊満な土偶の乳房夏旺る
日盛や土偶は口を半開く
歩を止めて魅入る裸身の女神像
縄文のビーナス像とふ雲の峰
古き代を語る岩偶風薫る

入選 思い出のふるさと

東京都世田谷区(北秋田市出身)

石川 昇

根元から始まる雪解ぶなの森
春祭母は十八番の「支那の夜」
野路剥く手指の汚れ気にもせず
駅までの歩きの三里青田風
新蕨へ大の字ジャンプあにおとと
父帰るリュックサックにあけびの実
地吹雪や体寄せ合う登校児

入選 十三夜

にかほ市 佐々木 亮子

神主の父朗朗と淑気かな
太鼓打つ神主芯に春祭
薫風にたたまれてゆく祝詞かな
小さきより父似と言はれ白芙蓉
定年のなき父の背や菊日和
本棚は父のふところ十三夜
鱒の海見て父の忌を修す

入選 夏書

秋田市 松井 憲一

臨書する義之の心経わが夏書
夏籠や母の形見の端溪硯
夏書すや仏の母をまなうらに
母訪はむ夏書の海や潤すまじ
夏書いま亡き母の声どこよりぞ
大いなる一字一字の夏書かな
経納む早やいつしかに秋の風

入選 暮らしのほとり

能代市 塚本 佐市

海鳴りを松籟継げり入彼岸
シルバー席ゆづられて座す花疲れ
父は田に雪形保つ駒ヶ岳
古紙古書の十字結びや燕来る
うす暗き水の胎内蕁搦む
いもうとに母の面影秋彼岸
新雪や白神寝嵩を豊かにす

入選 漆紙文書の国

秋田市 富野 三千雄

ひび割れし遺構の上に梅雨きざす
土器出でて籠の出でて夏至の砂
椀朽ちて熱砂に残る漆の朱
土囊持つ軍手の汚れ炎天下
焼山に出土の火輪鶏頭花
遠雷や千年を経し漆紙
風死せり埋め戻されてなにもなし

入選 曼珠沙華

由利本荘市 土谷 敏雄

古戦場忘するなかれと曼珠沙華
農一揆ありし境内曼珠沙華
曼珠沙華かつて此処には隔離棟
煉獄のあるてふ教曼珠沙華
曼珠沙華除草剤なぞ己が身に
誘惑を染めて解毒の曼珠沙華
曼珠沙華黄泉平坂朱に染めて

入選 日は海へ

秋田市 丹野 剛紀

船長の手づから捌く桜鯛

鯨焼く煙の匂ひ日は海へ

見遣るたび滴るばかり秋田富士

小さき手に汲む力水草の花

裏の田にあまたのあきつ蚶満寺

盃は新屋のガラス新走

時化去るやいなや鮎船船出

グリーン賞 青春謳歌

大仙市 齋藤 瑞希

恋をして初めて知った桜色

君のせい長く感じる夏休み

夏空に輝く姿体育祭

君を見てほんのり頬赤夏日向

夏祭りいつもと違う君姿

クラTを身に纏う友星月夜

君の名が出るたび跳ねるうさぎかな

入選 廃校

八峰町 浅田 英夫

少子化の打ち寄する波春深し

たんぽぽや長き坂ある通学路

大西日動きを止めし大時計

講堂に残る跳箱青田風

碑の校歌ぼつりと晩夏光

かなかなや子等の歓声遠ざかり

卒業のタイムカプセル大櫓

川

柳

川柳

最優秀賞 やびつごぼ

秋田市 伊藤 光 愁

手探りの迷路を照らす月明かり
まといつく迷妄醒ます弥陀の声
まず今日を生き切ることと言ひ聞かす
小心とバレないように毒すこし
強がりかまた邪魔をするさびしんぼ
丸の中入りたくない入りたい
心奥のわたしをゆるり解き放つ

奨励賞 郷の風

秋田市 荒木 小菊

軽やかなリズムに変わる郷の風
近道をのんびり風を道連れに
走る子が消えブランコに老夫婦
雀にも少子化という寒い風
羽化の蟬この世に頭ぶら下げて
故郷の風着るように衣更え
風鈴に訛りの風が吹くようだ

奨励賞 昭和回想

秋田市 鈴木 明夫

豪快な父 真綿のような母でした
背くらべ柱の傷と思ひ出と
道草を食って芽生えた好奇心
青春の空間ボクの四畳半
子育てを終えた夫婦のひと休み
気がかりはツケを背負った孫のこと
昭和回想 時は流れて現在地

奨励賞 こんな夏

由利本荘市 澤田 幸代

涼しげな夏を迎える畳替え
席譲りそつと車両を移動する
褒められて一日だけの有頂天
髪切るか結ぶか暑い昼下がり
しみりと語りたのに晴れ渡る
円満な風の噂に癒やされる
ほやの味しつてやつぱり父さん似

入選 再起

秋田市 佐藤 明子

自動ドア開くこの世の退院日
お借りした命磨いて返します
まだ跳べる心はいつも旬の宿
蟠り忘れ上手に日を重ね
許し合う心の窓は曇らない
夕映えに真つ赤に染まる明日の夢
五感まだ咲かず卒寿の花の笑み

入選 再会

秋田市 三浦千両

ふるさとへ丸い話をおみやげに
おもかげの君がちらつく里景色
初恋の火種を煽る不意の風
ひしと抱く拉致のあの子に会えたなら
木漏れ日を揺らすあなたと相聞歌
善を積む彼岸で褒めて欲しくつて
花香るあの日と同じ夕日影

入選 石けり

秋田市 菅原浩洋

野の風にからまり生きたしつぽ持つ
でこぼこを磨き続けて光る石
石けりの足が今でもまだ弾む
転がった石もやがては丸くなる
雨の日は森を歩いて葉音聴く
雨上がるバトルを止めて薔薇を買う
ゆつくりと秋の一部になるわたし

入選 忘却の中で

五城目町 佐藤ちずる

あの時の甘い疼きが胸にある
本音まだ言わず聞かずに通り雨
一睡の夢の逢瀬かさくら散る
届かない愛を抱いてる鏡裏
ずぶ濡れの過去からこぼれ出た寡黙
炎の残像そつと抱いてる花鏡
忘却の彼方に置いてある本音

エッセイ

エッセイ

最優秀賞 母と野球

湯沢市 高橋 文子

「おばあちゃん、今年も高校野球ノート、書いているの？」

「もちろんだよ。秋田県大会から書いてるよ」

「へえ！マジで！すごいなあ」

二年前の夏、新型コロナウイルスの影響で帰省できなかつた甥と、兄のスマートフォンでビデオ通話をした時のことだ。画面の向こうで甥は、元気になっているか、仕事は順調か、などと聞かれるがままに答えていたが、母の顔が映るなりすぐさま聞いてきた。

高校野球の試合結果を書き込んだ「高校野球ノート」を、母は一体いつから書き始めたのだろうか。五年前、金足農業が大旋風を巻き起こした時には、もうすでに始まっていた。

あの時母は燃えていた。父と二人で枝豆の出荷作業に追われながらも、ラジオをかけて、

夜にはスポーツニュースをチェックして、記録をつけた。一回戦の鹿児島実業戦から決勝戦の大阪桐蔭戦に至るまで、ホームランやスクイズの場面など、こと細かに書き込んだ。選手の守備位置、打順までもが記されている母のノートを開けば、今でも実況中継ができていなほどだ。中村計『金足農業、燃ゆ』は、もちろん買ってあげた。

母が高校野球で応援するチームは、まずは秋田県代表。その次は東北圏内の高校。東北のチームが敗れると、北海道か千葉、あるいは愛知の高校。北海道は東北に近いからだと思うが、千葉や愛知は親せきがいるからという理由だ。それから先は、注目されている選手や、そこまでの戦いぶりで気に入ったチームを見つけているようだが、特に根拠があるようでは無かつたりもする。

昭和の時代は、テレビでは、プロ野球のナイター中継が盛んだつたから、母は少しずつルールや選手名を覚えて、野球を見て楽しむようになった。母はずっと巨人ファンで、往年の名選手の名前が口を衝いて出てくる。

「あの選手がいた。この選手もいた……」というように。ひと通り言い終えると満足気

ある。

東北に楽天が誕生してからは、もちろん楽天のファンでもある。東北愛といったところだろうか。娘が仙台に住んでいた頃、田中将大投手のタオルを送ってくれた時には、早速ピンで留めて玄関に飾った。満面に笑みを浮かべていた。

セ・パ両リーグの他球団のことも、まあまあ知っている。秋田出身の選手といえば、断然、落合博満氏だと言う。鈴木忠平『嫌われた監督』も、願われて買ってきてあげた。

三月にはWBCにも熱中した。まるで大谷翔平選手の親せきか何かのような口振りで、連日のようにその活躍の様子を聞かされた。

母は読書家で、読むことも書くことも好きだ。毎日つけている日記は、もう何十冊にもなる。母が「高校野球ノート」を書くようになった訳は、おそらくはこの二つ、野球の面白さを知ったことと、もの書きが好きなこと、なのだろうと私は思っている。漢字を書くことでポケ防止になると本人は言うが、書くことによつて癒やされているようだ。

そしていつの間にか、毎年、春と夏の甲子

園の時期になると、母の傍らには、常にノートが置かれるようになった。居間の座卓の、時には上に、時には下にあるそのノートは、母だけが手に取るものだけれど、我が家の風物詩となった。

母は今日はお茶会と称して公民館へ出かけた。同年代の主婦仲間七人が集う井戸端会議だ。炊き込みご飯やポテトサラダをタッパーに詰め、いそいそと出かけた。みんなそれぞれに、手作りのまんじゅうや寒天寄せなどを持ち寄り、午前中から集まり、昼食、昼寝を共にし、夕方まで過ごす。一年に何回か行われるこの会合は、母の楽しみでもある。案の定、その仲間には、母の野球の話についていける人はいないらしい。それはそれで良いとして、帰って来てからナイター中継があったら、母はきつと見るのだろう。この八十歳は、みんなと同じように世間話に花を咲かせが、実は、野球好きである。そんなことを思っていると、少しおかしような、誇らしような気がしてきた。

母は、自分では意識していないかもしれないな

いが、野球を、心の中の確固たる位置に置いていた。多分、ごく自然にそうだった。その位置は、日々の暮らしとともいい距離にある。夢中になり過ぎず、離れ過ぎず、時を捉えて引き寄せる。もはや野球は母の趣味となり、母は上手に距離をとって楽しんでる。高校野球に関しては、まるで、毎年決まった時期に、心の友に会いに行くような、確かな喜びとなっている。

野球は母の心に握力をつけてくれた。そしてその握力は、書き続けることによって、弱まることはない。

また今年も、母の熱い夏がやって来る。

そろそろ、ノートを買ってきてと言われる頃だ。母のお気に入りには、青の表紙のキャンパスノートだったはずだ。

奨励賞 ただ、生きる

秋田市 佐々木 真知子

昨年の暮れ、一度雪が積もつてから大慌てで雪囲いをしていた時に椿の葉の重なりの中で蜂の巣を見つけた。

何気なく木を縄で縛ろうと近づいたら、葉の陰から何か異様なものがちらりと見えた。

覗いてみると私の両手に収まるほどのスズメバチの巣があつて、息をのんだ。

もう巣は使われていないようで、蜂の姿は一匹もない。数日雪をかぶつたはずだが、傷んでいるところもなくきれいなままだ。スズメバチの巣にしては小さいが、あの特徴的な柄なので間違いない。ページュと薄茶、それに焦げ茶色が段々に重なりマール模様になっている。自然の造形はおもしろい。

木の枝を掃うと、巣の表面に丸い穴が二つ並んで開いているのが見える。丸みを帯びた巣にある二つの穴は目のようで、まるで動物の顔だ。何となく視線が感じられたのはこれだったのかと納得した。少し離れた位置から

眺めてみると、フクロウが、じつとこちらを見つめているようで怯んでしまった。存在感があつて生き物の気配のようなものさえ感じられる。呼吸をしているようだ。

調べてみると、これはヒメスズメバチの巣らしい。この蜂は、おとなしく攻撃性もほとんどない種で、巣も小型だ。

巣のある椿は、裏口の近く、庭の隅の小屋の横に立っている。これはいつ作られたのだろうか。一般的なスズメバチは、四月ころから営巣を始め七月から十月までが最盛期、十一月まで活動しているらしい。その間、私は、日常的にすぐそばを歩き来していたのに全く気づかないでいた。自分ながらその迂闊さに驚くが、蜂の方が遠慮しながら共生してくれていたのだろう。

我が家の小さな庭にも、様々な昆虫や鳥が来てくれる。

アシナガバチの巣は、ベランダの屋根や、軒下、車庫のシャッターに、毎年二個や三個はあつたものだ。それがここ数年見当たらなかつたのだが、今度はスズメバチの巣だ。

玄関前の橘の木に青虫がたくさんいた時期もあつた。春に、初めて葉の陰に小さな青虫

を見つけて驚いたことは忘れられない。

葉を食べてどんどん大きくなっていく幼虫の成長の早さ、青虫のコロコロとしたやわらかそうな体形とやさしい若草色に魅せられて毎日観察して楽しんだ。それがある日突然いなくなり、しばらくすると、庭に、羽化したばかりのようなクロアゲハが頼りなさそうに飛んでいる姿が見られる。蛹はどこで過ごすのかめつたに見ることはなかつたのだが、ちやんと蝶になつてくれたと嬉しかった。

ヒヨドリの子育ては、特に印象的だった。もう十年ほど前に、トイレの窓のすぐそば、手を伸ばせば届く樅の木の枝にヒヨドリが巣を作つた。人の暮らしのただ中である。

見つけた時は、まだ巣作りの最中だつたが数日すると卵を産んだようで親鳥が巣に座っている。枯れ枝や枯れ葉、ビニール袋の切れ端まで使つて巧みに作つてあるその住まいは少し狭そうで、長い尾がはみ出している。その後二週間も親鳥は卵を守り続けた。

ある朝、親鳥がいなくなると気にしていたら、巣の中から赤い小さなくちばしが見え、ヒヨヒヨヒヨと鳴き声が聞こえる。そこにお母さんが餌を運んできた。すると、まだ毛の

生えていないつるつるした頭で真つ赤な首の四羽が顔をのぞかせたのだ。雛が生まれていてた。

その後の母鳥の働きは目覚ましかつた。一日に何度も餌を運び、私が写真を撮ろうとカメラを近づけた時は、ピー、ピーと鋭く鳴いて子供を守った。親鳥に見守られて雛はどんどん成育し、いつの間にかふわふわとした黒い羽毛に覆われて鳥らしくなっている。彼らの家はぎゅうぎゅう詰めだ。そして、雛を見てからわずか一週間ほどした日に、巣はあつけなく空っぽになっていた。生き物がいない鳥の巣は、ただの物になってしまった。

じつと座り続けて卵を守る親鳥の様子、餌を運ぶ母鳥、何より日々成長し続けて健気に巣立つた雛たちは、私にたくさんの暖かいものを残してくれた。「彼らは、今生きています」と実感させられた日々だった。それは、とても幸せな時間だった。

その次の年も、ヒヨドリは庭の椿の木でもう一度子育てをしてくれたが、それ以後は一度もない。ミノムシをたくさん見た時期もあったし、カマキリが多い年もあった。今は、セミの抜け殻の多さに驚いている。

町中のささやかな庭でも、昆虫や鳥のような小動物の営みがあつて、人の身近でいのちを紡いでいる。

昨年は夫が重い病を得て入退院を繰り返して、病後の状態も元気とは言いがたい。体力は落ちたまま、味覚障害も長く続いて、思うように動くことや食べることの喜び、楽しみを失くした日々だ。その上、娘の義母や夫の友人など大切な人が亡くなった。実感はないものの、死を考えないではいられない一年だった。そのためか、植物や小動物の「生」が目にとまり、そこから力をもらった。

花や木も昆虫も鳥も、シンプルにただそこで生きている。

ただ懸命に今を生きること、それができたらしい。

奨励賞 日本海、帰り道、 鳥海山

東京都東村山市(にかほ市出身)

大久保 菜 巳

二〇二三年六月一九日。にかほ市平沢の砂浜で、私はハイボールの缶を開けた。午後三時に家まで仁賀保の市街地をだらだら歩き、途中コンビニで五百ミリのハイボール缶を買い、私はそこにたどり着いた。

地元である秋田を出て東京の大学に通っている私だが、今年に入ってから急に何もうまくいかなかった。何があつたかなんて挙げたらきりが無い。とにかく、いつでも、どこで何をしても涙が出るような状態になっていた私は、ヤケクソで秋田夜の夜行バスに乗った。急な帰省にも嫌な顔ひとつせず迎え入れてくれた母には頭が上がらない。

秋田に着いたのは、六月十七日の朝だった。母が仁賀保駅まで迎えに来てくれて、「今はお互いごはんを用意するのも面倒だし

よう」

と、途中寄ったコンビニで冷たいとろろそばを買って食べた。東京でも食べた味だったが、向こうで食べたときよりも不思議と甘かった。バスでうまく寝付けなかった私は、その後はずつと寝て過ごした。

十八日は、母と家でのんびり過ごした。そのとき父は出張中で、父も妹もいない。久しぶりに過ごす母と二人きりの時間はなかなか面白かった。いつの間にか仕上がっていた成人式の前撮りの写真をなぜか自慢げに見せられたのがむずがゆかった。

そして十九日。この日は平日で母もいなかった。私が秋田に帰って来た目的は、母に慰め、甘やかしてもらおうことと、もうひとつあった。それが海を眺めることだったのである。

缶のふちに唇をつけると、ぬるい雫が口の端から滴ってくるほどに結露していた。東京よりはいくらかすずしく思っていたこの場所にも、確実に夏が近づいているようだった。それでも中の液体はまだ冷たかった。独特の甘い香りと炭酸の弾ける音が喉を抜けると、

鼻の奥にまとわりつくような潮の匂いと荒い波の音が、よりはつきり感じられるようになっていった。気まぐれに買ったものだったが、正解だったと思う。それから私は、波打ち際にある穴から小さなかの出入りするのを肴にしながら、たまに缶を傾けた。

砂浜に來たくせにおしりに砂がつくのが嫌で、私はしゃがむ姿勢をとっていた。だんだん脚がしびれてきて、かかと辺りから触覚が消えていく。この感覚には覚えがあつた。

潮の匂いがする、海のすぐそばにある小学校のグラウンド。あのときも私は、土におしりがつかないよう、限界までしゃがんでるようにしていた。

小学校は嫌いだった。勘違いだったらあの頃のクラスメイトたちに申し訳ない限りだが、私は多分いじめられていたのだと思う。陰口を叩かれたり、グループ活動から省かれたり、無視をされたり、汚いから教室のものに触るなど理不尽に怒られたり。面白かった記憶などほとんどない。学校行事の海遊びのときも、友達などろくにいなかった私は、かにやえびをバケツに入れて、今そうしている

のと同じように眺めていた。

悲しいことに、田舎は狭い。結局その環境は中学、高校と私に付きまとい、まともな学校生活を送ることは叶わなかった。それでも意地で通っていた高校の帰り道では、いつも羽越線普通列車の窓から日本海を眺めては、早くここから逃げようと考えていた。なんとか秋田から逃げ出そうと、大学受験のときには人一倍努力していたつもりだ。

そうして、なんとか憎き秋田県を脱出したはずなのに。あらゆる関係が希薄な中で一から生きられる東京は、秋田よりずっと過しやすいかかったはずなのに。結局ここに帰ってきてしまった自分が気持ち悪かった。

すっかり軽くなった缶から、カラカラと死にかけての炭酸の音がした。目の前には、つまらない回想の頃と全く変わらない海。半ばトラウマに近い場所なのに、どうも嫌いにはなれなかった。

日本海に背を向けた。または、鳥海山のほうを向いた。帰りは、小学校の通学路を歩くことにした。

あの頃の私は、日本海を離れ、鳥海山に向

かって伸びる長い田んぼ道を帰っていた。ひとりぼっちの帰り道は、大概下を向いて歩くものだ。当然、ひとりぼっち小学生の私もそうだった。うつむいて、そのまま少し左に顔を向けると、田んぼがあった。周りのクラスメイトたちの会話が耳に入ると寂しかったので、私はいつもその水面を眺めていた。かえるなんかたまたまに水面を揺らしてくれるので、気がまぎれたのだ。

知らぬ間に、その田んぼは放棄されていた。好き放題に伸びた緑のススキが、道のほうに頭を下げていた。私は、あの頃の唯一の友人を、いつの間にか失っていたのだ。腹の底がぐつと持ち上がるような寂しさに、喉が詰まった。けれど、十年も経てば、そりゃ変わりますよ。そうも思った。

そりゃ、変わりもする。自分で言っている、妙に腑に落ちた。ふと、鼻の奥を潮の匂いとアルコールの熱がかすめた。私も変わったものだ。

二十日の昼の新幹線で、私は東京に帰った。秋田を出てすぐの活きが良かった私とは、すっかり変わってしまった。でも、人な

んで案外こんなものなのかもしれない。秋田に対する思いも変わった。私は、秋田がちよっぴり好きになった。

新幹線は秋田―大曲間の田んぼ道を、後ろ向きに走り抜けた。

入選 ぞうさんのうた

井川町 小林 康子

七月十日、妹と私と母の三人だけの誕生会を開いた。

小さな五号のケーキの上に「石川フキさん、101歳おめでとう」と書かれた楕円形の板チョコが飾られている。妹とハッピーバースデーを歌った。途中から母も加わったがハッピーバスと言葉がつづめられひとりだけ早くなる。

私と妹は笑いながら歌った。ふたりとも古稀を過ぎ老いの括りに入るが、気分は幼い頃の母と子どものようなでなんだかくすぐつたいようなおかしさと、そしてなによりも今のこの温かい時間がもうしばらく続いてほしい、と思いながらの歌だった。

キャンドルは一本を百年として、もう一本は一年として二本立てた。母は勢いよく「ふうっ」と吹いたが一本しか消えず「あらら」とこんどは母が笑った。

去年の百寿のお祝いで、孫のひとりを取り

寄せてくれた母の生まれた日の讀賣新聞がある。

大正十一年七月十日。

(森鷗外逝く―九日午前七時)

(又名疑似ベストー大阪はこれで六名)

(獨逸破産に瀕す)

(五寸短くなる巡査のサーベル)

(厄介な北満の馬賊)

等の見出しがある。その他プロシアとか支那政府とかの記載もあり、それはもはやはるかな歴史で、一世紀という歳月はそういうことなのだ実感できる。

新型コロナウイルスがまん延し始めた三年前、百年前には世界中にスペイン風邪が流行していたとの新聞記事があった。母が生まれたこの頃だったのだろうか。

コロナ感染症の第八波で、シヨートの施設に入所していた母が罹患した。それなりの持病もあり超高齢の母のリスクは高い。「覚悟するしかないね」と孫たちとも連絡をとりあったが、施設で隔離されて十九日目、陰性になりみごとに回復した。

「なんということでしょう」と、妹と私はテレビでよく流れているこのセリフをまね、

喜び、ひとまずホツとした。

持病といえ、先日食後の菓を飲みながら「どこも痛くもかゆくもないのに、私は何の菓を飲んでいるのかね」と突然言いだし、お茶を飲んでいて私は危うく吹き出すところだった。母の主病名はなんだろう。

「母さん、百年間で一番強く記憶に残っていることは？」と尋ねると「さあ」と言いよどむ。戦争の辛さも貧しさもなかったわけではないだろうが「さあ」というのはそれほどのことではなかったのか。

母は長女として生まれ、家付き娘として育ち、戦争で身内を亡くしてもいない。貧しさは社会全体のことだったろうし、そうした中でささやかな喜びと、理不尽さを抱える普通の日常が続いていたのかもしれない。

割り箸のアイスキャンデーがおいしかったこと、夏の一回だけの出戸浜への海水浴、千秋公園にみんなで汽車に乗り、重箱を持ってお花見に行ったこと、井戸で冷やしたメウリの味。母の思い出は淡い色彩をもっていて、その中には幼い私と妹と弟がいる。悲しかったことは長男が自分より先に逝ったこと、と

一度だけ呟いたことがあるが悲しかったことは言葉にしたくないとも言った。深い悲しみに蓋をして百年を生きるのは私には到底できそうもない。母の強さの一面が見えた言葉だった。

誕生日の翌日も晴れた朝だった。

朝げの支度中にラジオからぞうさんのうたが流れた。

ぞうさん ぞうさん

おはながながいのね

そうよ かあさんも

ながいのよ

ぞうさん ぞうさん

だれがすきな

あのね かあさんが

すきなよ

流しの窓から夏の初まりのさわやかな風が入り、口ずさむ私の心も晴れやかだった。なのに涙が流れていた。

母がいることの満ち足りた思いには、限りがあることの哀しみが混じっている。

自分中心で、おしゃれで、自立して生きていといこの間まで言っていた母は、母であり続け、私の母だった。

70歳で夫と死別し、96歳までひとり生活してきた母は、今シヨートの施設を利用しながら私と暮らしている。いつの間にかこんなに弱くなってしまうて、お迎えがきてもいいのにと言ってみたり、百年はあつという間だからこの先の世の中を見たい、とも言う。

101歳の惑いは日によつて揺れる。

七月の空は広い。

—空にゃ今日もアドバルーン—とベッドで歌っている母の細い声が聞こえる。

御機嫌な歌が廊下を通つて聞こえてくる。

※マクワウリのこと

グリーン賞 今も続いている 「楽しみ」

仙北市 赤倉 聖来

私は、高校三年の四月にある部活と出会った。「思いを言葉に表すってこんなにも楽しい事なんだ」と改めて感じる事のできる部活である。もうすでに、気づいている方もいらっしゃるかもしれないが、書いておこう。

私が出会ったのは、文芸部である。

私は、一年生への部活動紹介の場で文芸部を知った。そこで運営側にいた私は、一年生の姿を見て、二年前は私たちがそこに座り、先輩方の話を聞いていたんだろうと懐かしさを感じながら、学校生活が残り少ない事に寂しく思っていた。そして、部のキャプテンとしてステージ上にいる同級生らを尊敬の眼差しで見ている。「頼れる先輩」その言葉が彼らには、ピッタリだった。そんな彼らの姿を見て私は、このまま高校生活を終えて良いのだろうかと不安になった。高校三年間、ずっと新型コロナウイルスに怯えていた。私だけ

ではない。世の中全体が恐怖を感じていたのではないだろうか。学校行事にも影響を与えた。やむを得ない事だと、分かっているけれども悲しかった。これは、筆舌に尽くしがたい悲しみである。だが、多くの人はその悲しみを理解してくれるだろう。しかし、数年後、数年後と思い出話をした時に「コロナの影響で何も出来なかった」とは言いたくないと思っていた。言い換えれば、「コロナの影響で出来ないことも多くあったけれど、私はこの活動に熱中して頑張っていたんだ」と言えるように少しでも、今、できる事をしたいたいと思っていた。この思いにより、私は少しでも興味を持ったらずるすぐに行動するようになった。部活動紹介では、キャプテンがたった数分の中で、思いを素直に話していたのを思い出す。その思いのほとんどを受け取るかのように、一年生は最後まで真剣な表情だった。一方で私は、文芸部の紹介が終わった途端、文芸への楽しみが止まらなかった。普段、俳句を詠む事がない私が急にやってみたいと思つた。とても不思議だ。私が、文芸に興味をもつた理由をよく理解する事ができたのは、もう少し先の話になる。

入部届を受け取り、名前を書く。だんだんと入部する事に周りから何と言われるのだろうかと少し不安になっていった。もしかすると、良くない反応が返ってくるのではないかと、勝手に思ってしまった。なぜなら、三年生は受験に向かう姿があるべきなのに、私は勉強以外の事に夢中になっており、自分でもその姿は、良い事なのかと考えてしまっていたからだ。決して、悪いことではないと分かっていった。だが、やはり高校三年生の私が入部して良い事なのかと考えてしまう。そこまで、考えるのであれば、入部を諦めたら良いのではないかと思う人もいるかもしれないが、その戸惑い以上に文芸への楽しみが止まらなかったのだ。少し不安になりつつも、入部届けを先生に渡し、ことさらに平静を装いながら、話した。「文芸部に入部する事にしました」どんな事を言われるのかと緊張していた。しかし、先生方からは「頑張ってください」と応援の言葉をかけてもらった。予想外の反応への驚きと同時に活動ができることへの喜びが込み上げてきた。そして、担任の先生にこう話した。「もしかすると、入部できないかなって思っていました。ダメって

言われてしまうかもしれないって思っていたんです」すると、先生は「ダメって言わないよ。頑張つて下さい」と話してくださいました。を今でも鮮明に覚えている。顧問の先生に話した時のあのニコニコの笑顔も忘れない。

文芸部に入部して、第一印象を大切にしようになった。目の前に一本の花が咲いていて、周りに他の花は咲いていない。たった一本だけ咲いているという状況を皆さんにもイメージして欲しい。私が、その花を見た第一印象は「強さを感じる花」である。私と同じように感じた人もいれば、美しさが第一印象である人もいる。もしかすると、寂しそうだと思った人もいるかもしれない。周りの意見を聞いてしまうと、初めに思った事を最後まで貫き通す事は難しい。話すとしたらなおさらだ。だが、文芸は違う。感じたことや嬉しさ、ときには悲しさを素直に言葉に残すことが出来る。そしてついに、「だから、私は文芸部に興味を持ったんだ」と気づいた。

学校祭が終わり、一年生の時から入部していた部を後輩に引き継いだ。放課後は、いつも部室に行つて活動していたのと思うと悲しくなった。「燃え尽きてしまった」そんな

感じがして、何もやる気が出なかった。周りには、勉強を頑張っているのに私は、部活との切り替えがなかなか出来ていない。そんな状況にいる自分が情けなかった。だが、こんな私でも頑張れた。その背景の一つには、文芸がある。文芸部を知った時から、ずっとワクワクが止まらなかった。その楽しみが私に力を与えたのだ。卒業式が近づくにつれて、もっと文芸部の活動がしたかったと思うようになった。そして、なぜこんなにも文芸に熱中しているのだろうと自分で不思議に思っていた。高校生にしか感じられない事や高校生にしか伝えられない言葉がある。それを、文で伝える。本当に楽しかった。卒業したら、文芸と関わる事はないのではないかと思っていた。しかし、そんな事はない。私にしか伝えられない言葉があり、感じ方がある。それらをこれからも大切にすると決めた。

今まで私は、挑戦していく上で周りを困らせてしまう事が多かった。しかし、こんな私を応援し支えてくれた人がいる。その方達に感謝を伝えたい。家族や友達や後輩、先生。もつという。きちんと思いが届くように。

あの時、文芸部に入つて良かった。そう強

く思う。だって言葉や景色、文芸に関わる人と会う事ができるんだから。この楽しみは、誰にも止められない。

「次はどんな出会いがあるのだろうか」

最優秀賞受賞のいっげ

いっげの旅

詩部門 小林 康子

四月下旬、南富良野のコテージに四日間滞在しました。道端にはところどころ雪が残っていて、木々はまだ緑を纏わずつきりと立ち、観光地も巡りましたがコテージの近くを流れている空知川と何もない白樺の風景が一番心地よく、心に残って生まれた詩が「ソラブチの春」です。

日々の生活から離れ、いつもと違う時間に体を委ねると心が軽くなるような気がしません。

思えば詩が生まれる時も似たような感じで、日常から浮遊し自由な世界を漂うことばの旅はひととき自分をからっぽにし、風が吹き抜ける解放感を与えてくれます。

今回の賞はこの上なくうれしく、作品をお読み下さった先生たちに深く感謝します。

ありがとうございます。

感謝をいめて

短歌部門 工藤 美咲

大変大きな賞をいただき、とてもうれしく感じております。受賞のしらせを見たときは思わず「えっ!」と大きな声飛び出しました。「あきたの文芸」との出会い、約十年前。当時高校一年生の文芸部員だったわたしは、部活動のひとつとして短歌の作品を応募し、奨励賞を受賞しました。自分の短歌で賞をいただいたのは、それが初めてのことでした。

以来、何度も「あきたの文芸」に作品を応募してきました。わたしが大人になった今も、言葉で表現することの楽しさを忘れずにいたのは、「あきたの文芸」があつたからこそです。

選考の先生方をはじめ、関係者の皆様に心から感謝しております。そして、文芸という趣味を持つわたしを認め、応援してくれた、家族・友人・恩師の先生方。感謝しています。

受賞によせて

俳句部門 大橋 風太

受賞の知らせを受けて大変嬉しく思っております。俳句を始めてから十一年になりますが「あきたの文芸」で最優秀賞を受賞することが夢でありました。これまで三度挑戦し二回奨励賞をいただいております。しかしながら最優秀賞には届きませんでした。今回が最後の挑戦のつもりで応募したところ、望みが叶って感慨深い思いであります。

作品では亡き妻への思いをまとめてみました。妻が亡くなってから八年になりますが、連れ添った日々は褪せることなく大事な思い出として、私の心に深く刻み込まれております。良き思い出を大切にしながらこれからも歩んでいきたいと考えております。

今回の受賞は、所属している結社、句会の先生方や諸先輩のご指導のお蔭であり、深く感謝いたしております。また、私の作品を認めてくださった選考の先生方に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

意味ある句

川柳部門 伊藤光愁

思いもかけぬ受賞のお知らせをいただき、驚きとともに、大変嬉しく思っているところです。

川柳は、日常生活の中での喜怒哀楽を通じて人間を詠む文芸と言われていますが、それを十七音に詠み込むことはなかなか容易ではありません。最近、独りよがりになっている句が多いという事に悩んでもいたことから、今回の受賞はなにかしら吹っ切れたような気もしているところです。

自分の句が、読者にすんなり読まれ、伝わるこそが意味のあることだということを念に、今後も励みたいと思います。

拙い作品を、このように評価していただいた選者の先生方に心より感謝申し上げます。

ときめく句

エッセイ部門 高橋文子

母は読書家で、読むことも書くことも好きだ。このことは確実に私に影響した。そもそもこのような環境が作られたのは、書店に勤めていた叔母のおかげである。子供の頃に、叔母は度々本を買ってきてくれた。そして叔母もまた、かなりの読書家である。

毎日の暮らしの中に、書きたいことが山ほどある。劇的なことではなくても、小さなことにもときめく心を失わずに、人と、人の心もようを、これからも書き続けたいと思っている。

この度の受賞に際し、選をいただきました先生方に、深く感謝申し上げます。そして、私の家族にも、私を支えてくれている多くの方々にも感謝しています。ありがとうございました。

選評

小説・評論



書くこと、
読むこと

石倉 葵

応募作品11作はそれぞれに著者が「書きたい」という思いに突き動かされている様子が伝わってくるものでした。文章的な間違いやちょっとした技巧の稚拙さがあつたとしてもそれは編集の段階で修正することができまから、編集者としては何よりも「その人にか書けないもの」を書こうとしているかを基準の一つとしました。

入選となった「明るい北朝鮮」は、インパクトのあるタイトルのとおりシンガポールが舞台となった物語です。タイ語を織り交ぜた台詞のほかに、日本語で書かれた会話文は

たして日本語で交わされたのか、はたまた英語でなのか。その辺りも想像しながら楽しく読み進めることができました。激しいスコールや甘い緑茶、プラスチックでできた椅子とテーブルなど、東南アジアの風景が立ち上がってくる描写も効果的でした。夢は諦めたものの、「明るい北朝鮮」と呼ばれる国でそれなりに満足して暮らす主人公との対比で、夢を実現した同級生の女性二人のその後が必ずしも明るいわけではなかったという運びにもリアリテイを感じました。その反面、話の転換点となる紙袋に入ったメッセージとお金にはやや唐突な印象が否めませんでした。そこから結部に向かつては性急で、主人公にとって都合のいい展開に感じられたのが惜しいと感じました。また、タイトルでもあり、作中で主人公が記す大切なメッセージの文面にもある「明るい北朝鮮」は作品全体にどのよう響いてくるものとしているのか、読者としては作者の意図を図りかねた部分もありました。構成やタイトルをもう少し練るとさらによい作品になりそうに感じました。

選には漏れましたが、「中坊の分際で生意気な」は小説としての世界観が優れて描かれ

た作品でした。新聞配達に住み込みバイト、夜行列車といった時代を感じさせる言葉も味わい深く、千歳鳥山駅の東京らしくないのんびりした雰囲気や熊本の風景など、リアリテイだけでなく、書かれていないのにその土地の空気までふくらみを感じられるように描かれている印象でした。個人的にも「あきたの文芸」としては秋田に限らずともどこかにロリーカリテイを感じさせる作品を選ぶなど、方向性を示せたらもつと応募者も書きやすくなるのではないかといい思いもあつたことから、熊本弁の台詞も心地よい本作の味わい深さは魅力がありました。その一方で、本作はいわゆるモデル小説とも読めるのですが、このモデルをとおして作者が何を描きたかったのが明確に伝わってこなかったことが強くブッシュできなかった要因だったかもしれせん。

技量の違いこそあれ、書くという行為に応募者の皆さんが求めているそれぞれの切実さという点では、優秀つけがたい印象を受けました。書くという行為は一人でするもののようにいて、言語のルールや過去に書かれた膨大なテキストの上に成り立っているも

のです。一般的に学問の分野で言われる比喩に「巨人の肩の上に立つ」という言葉がありますが、それは今を生きる我々だからできること。もつと書けるようになりたいと願うとき、たくさんの過去の名作や、過去の受賞作、あるいは過去の選評に触れてみることは遠回りのようで近道……ではないかもしれませんが、着実に力がつく方法だと言えるでしょう。

「あきたの文芸」の小説・評論部門の制限文字数は二〇、〇〇〇字以内。これは小説でいうと短編にあたります。読むのは大変ではない文字数なのに、書いてみるとペース配分や作中での整合性、なにより表現したい主題をこの長さのなかに織り込むのには骨が折れたはずです。でも行き詰まったときこそ、過去に書かれた多くの作品たちが暗い道を照らしてくれるはずです。今後もおおいに読み、書いて、意欲的な作品を生み出し続けてほしいと思います。



選を終えて

羽田朝子

今年度の応募者は合計十一名、内訳は小説一〇篇、評論一篇であった。このうち小説二篇が奨励賞とグリーン賞を受賞した。

小説の選考にあたり、私が審査の基準としたのは、以下の三点である。一つは登場人物の造形や物語の構成がしっかりと設計されているか。二つ目は、情景や心理が巧みに描写されているか。三つ目は独自の世界観が表現されているか、である。

今回の応募作品は大きく以下の三つに大別される。一つ目は自己の経験や日常生活を素材にした作品である。なかには優れた作品も含まれていたが、文学にまで昇華するために、内面をさらに深く掘り下げ、なおかつ自己を客観的に捉える視点が必要だろう。二つ目は歴史に材をとった作品である。とりわけ秋田を背景にした作品は、その郷土性が実に魅力的だった。しかし、独自の歴史観あるいは創造性が打ち出されていると、さらに

良かったと思う。三つ目は、独自の想像に依拠したフィクション性の高い作品である。偶然であるが受賞作品は二篇ともこれに属している。いずれも人物造形や構成に工夫が施され、描写も説明的でなく比較的自然であり、独自の世界を作り上げようとする努力がみられた。

評論の選考基準は、対象の作品を適切に読解しているか、それに対する独自の考察を論理的に展開しているか、である。

以下、受賞作品について紹介する。

奨励賞の「明るい北朝鮮」は、構成がユニークであった。主人公の恋愛が成就する結末が描かれているが、物語はあえて恋人同士を中心にせず、共通の友人との交流をメインに展開する形をとっている。そして冒頭、主人公は友人の到来を待っていたが、結末では復縁した恋人を待つことになる。また異国情緒溢れる背景のなか、登場人物は物理的にも精神的にも国境を越えており、さらに秋田で過ごした学生時代の記憶も交差するなど、作中にはいくつもの時空が描かれている。ただし、主人公が居住しているシンガポールの政治体制に対する憂慮を吐露しており、それ

に関する言葉が作品タイトルになってはいるが、これについて作中では深い描写がなかった。この点で物足りない印象があつたのは残念だつた。

グリーン賞の「特別なあなたと、何回もデートの夢をみる」は、多様な性や愛情の形をモチーフとし、現代の若者の心情が巧みに映し出されている。主人公たちは性の商業化や情報ツールの発達により簡単につながりあうが、真情を分かち合う深い交わりを注意深く避けている。この作品は、こうした彼女たちにとつては貴重でかけがえのない、つかの間の愛情を描いている。ただし主人公二人がなぜ互いを「特別」だと認識して魅かれあい、なぜ別れを選んだのか、物語のなかで重要な心理描写が説得力をもつて描き切れていない。そのため、とくに主人公の感情が最も高まる結末では、読み手がその心情をよく理解できず、置き去りにされた印象である。

最後に受賞には到らなかつたものの、印象深かつた作品について述べておきたい。

小説「畑中チビ的考察」は、猫の視点で飼主やその家族、近隣の人々の人間関係や生活ユーモラスに描き出している。語り手が

いかにも猫らしい愛くるしい性格を備えており、主人公の造形に成功している。ただし物語の展開がやや単調で、筋に一ひねりがあるとさらに良かったと思う。

唯一の評論だつた「聖女考 カズオ・イシグロにおける「献身」について」は、高校教師が生徒に語りかける形式をとり、作品に描かれた科学技術と人間の在り方について分かりやすく解説している。教壇で語るのであれば魅力的な授業になるうが、内容の大半があらすじやシーンの紹介であり、独自の論を展開する部分が少なかつたのが残念だつた。

詩

思いを
伝えるために



寺田 和子

七月半ばの大雨による災害とその後の猛暑の日々を考えると胸が痛む。罹災された方々

の生活が一日も早く回復なざることを切に願う。ロシアのウクライナ侵攻はウクライナの反転攻勢もあつて長期化しており、五類移行後のCOVID19の勢いも増減をくり返す。

加えてインフルエンザの流行や気候変動による世界各地の災害もあつて、内外ともに日常を脅かすものごとの多いこと。このような状況下でどのような詩が紡がれるのか関心をもつて作品を読ませて頂いた。

最優秀賞 ソラプチの春

すっかりした構成と過不足のない表現で安定感がある。アイヌの人々がなぜその川を「ソラプチ」と名づけたのか、ソラプチの語の意味が書かれていたなら人々の暮らしが見えて奥行きが増しただろう。

奨励賞 夏至の汗

かつて米作以外の収入減として勧められた乳牛飼育。そのための良質なサイレージを作る作業に汗まみれで取り組んだ少年時代。今夏の猛暑に農政への批判的な思いもかみしめていたのだろうか。

奨励賞 多過ぎる余白

十七歳で五十七歳の母を喪つて以来、心に

響かせてきたレクイエム。作者は末子だろうか。そうだとしたら最も長く母の心を占めていたのではないか。第一連「五十七歳の母と」／／／「知れない」に絆の深さを感じる。ひとつ試してみたい。一字下げで書かれた心情表現の三つの連と最終連とを除いた場合とを比べてみることを。

入選 畑ものがたり

童話のような詩で楽しんで書いているのが伝わる。土と作物との対話を重ねているからこそ書ける向目的な詩である。

入選 たぶん、私の未来

全ては夢の中の出来事のように。自身の誕生から現在までを辿る形で未来を予想する。若い作者の詩。

グリーン賞 Réveur

普通の高校生から非日常の夢舞台で踊るひとりへの「変貌」。終わり五行に込められた思いを汲む。

グリーン賞 隣の蒼い君へ

「おお」に心魅かれる時がある。青、蒼、碧などの漢字。「蒼」の字義は草のような青い色、こい青色、深青色、青くしげるさま。この詩ではどの意味がふさわしいだろう。

「まるで静かな恋のように／黄昏の空に宵螢が飛んでいる」「暝色に反射する夕顔のよう／蒼い鳥はほほ笑んだ」の詩句が印象的。

グリーン賞 815

題は広島への原爆投下の時刻。「生き残った私」の語りで展開する。第一連「底のない瞳」の「痩せこけた犬」の不気味さ。オノマトベがうまく機能しているかどうかは今後の課題だが、ロシアが核の使用をちらつかせて威嚇している現在、若い作者が頑張つて取り組んだ姿勢に敬意を表したい。

なぜ詩を書くのか。伝えたい思いがあるから、とシンプルに私は思う。ならば、思いにふさわしい言葉を探し求めたい。どのように書けば読む人の心深くに届くのか。まず、自身の伝えたい思いをしつかり掘りさげて捉えたい。今回の選考を終えて改めて確かめることができ、機会を与えて頂いたことに感謝を申し上げたい。

十代から八十代までの方々の詩二十八編に向き合い、自身の心の揺れを確かめつつ読んで。入賞作品のほかに印象に残った作品は「エミューの眼」「月の記憶」「秋の日」

「ウソ」「午前三時の夢の創作」である。「くらげうた」は童謡的であった。来年の再会までお互いに更なる高みをめざして精進したいものである。

詩誌「歷程」「密造者」同人
秋田県現代詩人協会会員



自分の言葉で

保坂英世

「詩とは何だろう」いつもそこから始まる。思ったこと、感じたことを書くのだった。別に詩でなくてもいいからだ。一見詩のスタイルをとっていても、読んでみれば普通の文章とさほど変わらないということもままある。「詩とは何だろう」まだ自分でも答えは出していない。このたびの選考にあたって、まず杉山平一著『現代詩入門』を読み返してみた。この本でも「詩とはどういうものであるのか」という言葉から始まっている。「そして定義することが大へんむつかしい」と続いている。それでも読み進めていくと、いつし

か目が開けてくるという大変ありがたい本なのだ。まずそういう手順をふんでから選考に当たった。

二十八篇の作品を読ませていただいた。この数字が多いのか少ないのか、初めての私には分からない。記録によると減少傾向がつづいているようだ。ただ応募作品のうち十歳代、二十歳代の作品が十篇と比率が高い。これは他の分野に見られない傾向だ。ずいぶん前のことだが、詩は青年の文学といわれていた。現在県内の書き手が高齢化している中でこれはうれしいことだ。

このたびは私の中で二作品の優劣がつけづらかった。『ソラブチの春』と『畑ものがたり』だが、悩んだ理由としてこれらの詩の世界観がまったく違うというところに一つの要因がある。『ソラブチの春』は隅々にまで神経の行き届いた文章の配置である。端正な言葉で情景を示しながらゆつたりと時の流れを進む。まとまったうまい作品といえる。一方『畑ものがたり』は野菜たちの会話で進む。擬人法はなかなかむつかしいものだが、この場合は澁刺としていて成功している。少し暴れているところが魅力になる。この静と動の

違い、これを判定するのは基準そのものが違うので大変だ。まとまっているということ、反面書き慣れた感というプラスに働かない評価にもつながるので、内容が大事になってくる。暴れているということは面白さに通じるが、見方によれば欠点も目につくことになる。何はともあれ最優秀賞は『ソラブチの春』に決まった。最初選考委員三人の押す意見は微妙に分かれたが、この作品は常に共通した候補としてあった。最後は安定性が得点をあげたということだろう。

奨励賞の『夏至の汗』は丸い空から青草を落とすという映像から始まるところが効果的である。たんたんと進む語りも好感がもてる。ただ最終連は説明的で残念だった。詩は最後が大事。この連をカットして「暑い夏至の日。」で終わったほうがよかったかもしれない。同じく奨励賞の『多過ぎる余白』、母との別れを書いた詩である。正直、最初読んだときはスツと入ってこなかった。吹雪の後の展開についていけなかったからかもしれない。読み返しているうちにじわじわと良さを感じてくる詩。

入選の『畑ものがたり』については前記

のとおり。同じく入選の『たぶん、私の未来』、素直な語り口に好感がもてる。素直だからこそ軽い足取りで次に読み進んでゆける。

グリーン賞の『Rêveur』、『隣の蒼い君へ』、『815』については選考委員の意見が一致した。この原稿に余裕がないので評は省略するが、今後の活躍を祈りたい。

最後に応募作品の中で他人の詩の表現によく似た記述があった。詩に本歌取りはない。引用した場合は後ろに注で表記することになっている。数多くの詩を読み参考にする場合は勉強のために有効だが、作品とする場合は自分の言葉で語らなければならない。

*秋田県現代詩人協会会員、詩誌「日本海詩人」同人



客観的な目で 推敲を

前田 勉

今年の応募状況はここ五年間で最も少ない二十八編であったが、年齢別で十代が最多の

八名ということに少しばかり安堵した。他世代はもとより、次へとつながる位置付けであつてほしいと切に願つてゐる。

委員三人による選考の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、入選二編、グリーン賞三編となつた。

・最優秀賞 「ソラプチの春」

アイヌ語でソラプチ川という「空知川」の春を描く。「水中をうねるように／気泡が舞い／今を引き連れていく」川の躍動を、「名もない川を／ソラプチと名付けたみんなはどこに行つたのだろう」と問うことで対比させる今と過ぎた時間。終連は自身を置きながら、空知川の「空」をイメージ化するうまさ。安定した表現力を持つてゐる。

・奨励賞 「夏至の汗」

青草をサイロの中で踏む作業を通して、略農に夢賭けた父の姿を追う。終連「今はもうそのサイロもない／びっしよりの汗は地に消えた」は、現在の位置付けがしっかりと確認されているからこそ言える。営農の時代変遷を言い表しているようでもあり含みを感じた。

・奨励賞 「多過ぎる余白」

亡くなつた母に対し、「氣の利いた言葉も言えなかつた」と悔やむ思いを自問。多感な少女の揺れ動く心情の表出がよく伝わつてきた。ただ、そのことに終始したような感もあり構成面で惜しい。

・入選 「畑ものがたり」

ほのぼのとした世界が描かれている。野菜の特徴が良く表現されていることや擬態語の楽しさもあり、野菜を作つてゐる人の優しい視点を感じた。欲を言えばもう少し展開が欲しかった。

・入選 「たぶん、私の未来」

「永遠に目を閉じた」母への思慕。「もう一回／会うことは／できるかな／もう生まれ変わつて／いるのかも」と書く第七連が切ない。前半の設定にややこだわりすぎた感があるが、全体的に心情表現がよくなされてゐる。

・グリーン賞 「Rêveur」

「普通の高校生だつた日常」が夢舞台でスポットライトに照らされて「変貌」する。第一連の静寂さと緊張感の設定が全体を活かしている。「沈黙がスカートに触れて溶けてい

つた。」との詩行に表現力をみる。

・グリーン賞 「隣の着い君へ」

「追いつきたくて追いかけたくて」「声にならない／届かない／叶わない声で」と書き表す憧憬ともどかしさ。読んでいて久しく出会うことの無かつた素敵な叙情表現に詩の良さを感じたが、二連「頬を伝う雫」「玉石混合」といった月並みな喩の用い方と語彙の選択に違和感が残つたのは残念。

・グリーン賞 「815」

インパクトのある詩行がテンポ良く続く。生き残つた何も選ばない「私」は犬に「せめて立て」られ、追われる。ギャン、ドンツ、キヤン、「なま温かい」などが強烈に読み手を引き寄せるが、表現伝達しようとした暗喩の世界が見えにくい。

選を終えて感じたのは推敲不足が多かつたこと。客観的な目で自作を読み返し、構成、語彙の適不適、誤字、「い抜き」「ら抜き」の文体などには最低限注意を払いたい。

詩誌「密造者」、「海市」各同人。県現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人

短歌



五十六編の タイトルから

伊藤 寛 雄

連日、猛暑日という記録的な夏でした。そんな暑い日に今年の五十六編三百九十二首の応募作品が届きました。皆様の熱い思いの作品を何回も読み直しました。その審査の結果は発表されたとおりです。審査の評についてはお二人の審査員が丁寧になされると思いますが、私としては応募された皆様全員の一首を取り上げて鑑賞したいと考えていました。しかし、紙数がかぎられていますのでそればかりではありません。そこで応募した皆様全員のタイトルを私なりに分類し並べ替えて応募した皆様の「想い」を感じ取ることにしました。

タイトルも作品の一部とよく言われます。並べ替えてみるととても味が出るように感じ

ます。

最初に古里や地元を詠ったタイトルです。地域に根をおろして日々を過ごすことの大切さを感じることができません。

「北ツ海風土記」「半島の景」「はまなすの渚」「雄物川」「鳥海の春」「かづのの四季」「山峡」「田舎人」「花・雉子・雲雀」「移りゆく季」「山と日々」「産土ことば」「空のひろがり」「秋田県讃歌」

自分の住む地域を離れて旅行に出ることは日々の暮らしにアクセントをつけます。実際に旅に出なくても遠い異国の空に想いをはせることや平和を願う気持ちも伝わってきます。

「思い出のロンドン」「日々片々」「ギリシヤ神話」「津軽路」「反芻の旅」「ウクライナを想ふ」「この星のひびみ」

青春とは輝く未来を見つめたり悩みを抱えたりする「時」です。そんな内容のタイトルは何かキラキラしています。

「合唱コンクール」「ラムネの瓶」「六月の雨」「青春のカタチ」「夏のゆくえを誰も知らない」「夏・青春」「鞆」「独り言」

自然とともに私たちは生きています。そし

て自然の脅威は人智を超えて私たちに襲いかかりました。そんな想いのこめられたタイトルです。

「自然」「大雨」「豪雨の夜に」「にわとりに寄せて」「動物と人」

ようやくコロナウイルスから解放されたように見えます。しかし、コロナウイルスは人間たちから感染の呪縛を簡単には解いてはくれません。そんな想いを感じながらのタイトルです。

「マスク外して」「看護日誌」

何と言っても家族の存在が短歌の題材になります。今回もいろいろな形の家族の歌が寄せられました。

「母」「父と母」「亡き人たち」「父の三十三回忌」「神のご加護ありて」「護符」「傘寿旨酒」「米寿」「寺参り」「新盆」「感慨に耽る」「亡母は明治生まれ」「珠玉宣言」

農業県秋田と言われていましたが農業を取り巻く状況は日に日に厳しくなっています。そんな中で農業について詠い続けることの大切さを感じさせてくれるタイトルです。

「農の今」「田作りやめる」「老いのつがや

き」

どんなに厳しい日々が続いても小さな子どもたちの輝く笑顔によって私たちは明日への活力を見いだします。

「小さな子のおい」「成長と私」「幸せなひととき」「明日に向かひて」

このようにタイトルを並べてみると今さらですが短歌っていいなあとつくづく感じました。短歌を作ることとは自分を詠み、身の回りの世界を詠むことです。そのことで「日々の歴史」「考え方の変遷」「家族の動き」などが三十一文字としてパッケージされます。そのパッケージ一つ一つ、つまり一首一首がタイムマシーンになるのです。やがて、その歌を読み直すと「詠んだ時」の喜怒哀楽、艱難辛苦が鮮やかに甦るはず。これからも楽しく短歌を作り続けましょう。



「あきたの文芸」 選評

山中 律雄

「ラムネの瓶」

「いなくなりたい」とつぶやく本音でも嘘でもなくて自傷のように

ラムネの瓶みたいだずつと胸にある違和感を吐くこともできない

現状の維持ができれば、生きてたら、上出来だから、だから、だまって

雲のない青空がちゃんと嬉しくて大丈夫
まだわたし、まともだ

応募作56篇を通読した段階で、一番注目したのが、「ラムネの瓶」であった。再読してもその評価は揺らぐことなく、圧倒的と言ってもいいほどの作品である。鬱屈とした思いを裡に潜めながら生きることの違和感が伝わってくる。少しだけ人生の辛さを知ってしまった作者の純粹さが心を打つ。

「明日に向かひて」

「救急車呼びませう」とふ声のして大事を知る助けぬ吾は

寝たきりの躰となりふつと甦る痛みに堪

へるし母の姿が

歩く日を想ひて娘の選りくれし運動靴にてリハビリ始む

達者な作者である。不意の転倒によって手術を余儀なくされた様子が描かれているが、

無理に作った感じがなく、素直であることを良しとしたい。「手際よく手配しくれし人の

名を知らねどその顔いく度浮かび来」は、作品としての独立性に欠ける。連作であつても、一首一首は独立した作品でありたい。

「新盆」

花東の三つを五つに組み直す小菊のあおい匂いのなかで

もう誰が眠っているかわからない五つの墓にでも手を合わす

祖母は今おそらく叔父のとこだろう盆提灯はまわり続ける

しみじみとして心に浸みる歌である。いい歌とは読者の心に響くものを言うが、それはうまい歌であつてもらいたい。その点で言えば及第点だ。「小菊」「五つの墓」「迎え火」など、それぞれが意味を持っていて、作者の思いが形となつて表現されている。

「青春のカタチ」

合唱祭間近みんなの鼻歌が聞こえるような増えてるような

悔し泣きそれがあなたの強みだと見てくれた本当の友

「ありがとう」泣いちゃうじゃんか笑う

なよちゃんと言春してたんだ俺

若い人の作品だろう。歌としては未熟だが、題名の「青春」の一齣、一齣が切り取られている。今の自分にしか歌うことの出来ない作品で清潔感がある。

「感慨に耽る」

七歳に戻れる魔法のオムライスケチャップで母が書く私の名

「天に戻りたいと思う日々高校の時と矛盾している

将来を心に決めたあの日からたかが一年

されど一年

新生活の中にあつて、いくばくかの不安を感じながら、家や高校時代を懐かしんでいる作品だ。懐かしさは寂しさを伴い、作品の背景に作者の思いが行きわたっている。

「日々片々」

蓮華つつじの花の真盛り見上げつつ青の極まる空に吸はるる

雨降れば雨に生き生き日が照れば日に輝

きて紫陽花の咲く

ふとした日常の光景の中に弾むような歌の世界を成している。「空に吸はるる」はあり

きたりの表現だが、この歌ではよく生きてい

る。

「小さな子のおい」

熱々のスープをゆっくり飲みように子の一日を手を止めて聞く

「亡き人たち」

予後の日々葉草を飲む母親に時間はあまり残ってなかった

山中律雄

短歌結社「運河」代表。秋田県歌人懇話会会長。日本文藝家協会会員。現代歌人協会会員。

歌集「刻ゆるやかに」（秋田県芸術選奨）、

「淡黄」（第50回日本歌人クラブ賞、第

25回島木赤彦文学賞）等。歌書「川島喜代

詩の添削」（第10回日本短歌雑誌連盟評論

賞）がある。にかほ市。



選考を終えて

古澤 りつ子

あきたの文芸の応募作品は若い人からベテ

ランの方まで幅広い年代の応募者がいて、と

でも読み応えがあった。今の短歌ブームに乗

って、若い人も日常生活の些細な出来事や、

心に止まったことをつぶやくように短い言葉

で発信している。人生に「何が起きるか」よ

りも、それを「どう感じるか」を表現できる

のが短歌の魅力だと改めて感じた。以下わた

しの注目した作品について触れたいと思う。

「ラムネの瓶」

「いなくなりたい」とつぶやく本音でも嘘でもなくて自傷のように

「笑顔には上手も下手もないじゃない」

「そうだね（きみは器用ね）ごめん」

ラムネの瓶みたいだずっと胸にある違和感

を吐くこともできない

口語でしかも会話のようにカギ括弧や読点

も多い。俵万智風のライトパス短歌ともま

た違う。素直な感情がそのまま歌われていて

好感が持てる。若い層の口語短歌として新し

い方向が見えると言つてもよいだろう。繊細

で自意識の闇をさまようような歌が多い。自

分自身の感情が中心に歌われているのもSN

Sという発信方法に慣れた若者ならではのあ

らう。

「小さな子のおい」

「ただいま」とピンクの傘が駆けて来るびしょびしょの手で抱きついてくる

熱々のスープをゆつくり飲むように子の一日を手を止めて聞く

小さな子とは多分お孫さんのことだろう。

こんなにも慈悲深く余裕を持って接してられるのが、とてもうらやましい。自分の子育ての反省も込めて思う。

「日々片々」

家の回りの囲ひを外し雪深き憂ひの晴るる

思ひにひたる

芽吹きの前の葡萄畑の静けさにひたりて細き草道歩む

雨降れば雨に生き生き日が照れば日に輝きて紫陽花の咲く

日常の暮らしを丁寧に読んでいる。写真短歌の伝統を守り、読んでいて調べがよく、歌に安定感がある。歌の中に南天、葡萄畑、蓮華つつじ、紫陽花、薔薇と芍薬、と季節の移り変わりに沿った花々が並んでいて、七首の構成もよくできている。

「合唱コンクール」

この海によみがへり来る夏ありと君らは歌ふ白波の列

正解の定まる間に倦みたりと謳ふ自由に吾も声を添ふ

中学校や高校で開かれる合唱コンクールの様子であろう。合唱曲の歌詞や歌の内容が短歌の言葉の中に巧みに組み込まれている。緊張感のあるステージの様子と、それを応援して聞いている作者の関係が、心地よく伝わってくる。

「反芻はさの旅」

早朝の静寂広がる伊勢神宮カラスの声も清らかに聞こゆ

内宮の新人ガイドは楽しげに小ネタ交えて語り滑らか

旅を終えた後の、充実した思い出に浸っている感じがよくわかる。旅の歌はありがちではあるが、この連作は取り上げる視点が個人的で面白く感じた。伊勢神宮のカラスや新人ガイドなどよく観察している。

「産土ことば」

「かいべさせたい」誰かつぶやく 遠く住む友らに紫紺のこの茄子漬を

方言を使った短歌にはなんともいえない魅力がある。地域に根ざした生活感があり、純朴で情の深い作者であろうと想像される。し

んみりとしたよい連作である。

短歌結社「白路」同人。現代歌人協会会員。秋田県歌人懇話会副会長。歌集「魔法の言葉」

俳句



感動の中心

片倉 俊秀

俳句で大切なのは感動の中心（表現の対象）だ。あれこれ考え過ぎると迷路に入り込んでしまう。いつも自分の感動に正対し、言葉を感じの中心にいかにつづけさせるかだ。最優秀賞「日記の余白」

今年また写真の妻と花の旅

妻の声聞こえるやうな星月夜

亡き妻の日記の余白秋深む

語りつつ落葉手で掃く妻の墓

今年も写真の妻と旅に出る。星空から妻の
声が聴こえる。日記の余白には二人の思いが
詰まっている。落ち葉の墓を手で掃く主人
公。まさに絶唱である。妻への哀惜が昇華さ
れ凝縮したすばらしい作品群である。

奨励賞「晋山法要」
しんざんほげよう

問答に応ふ青年目の涼し

寺を守る水辺の柵や水芭蕉

野ざらしや読経のさまに蟬時雨

新任職を迎えての法要である。期待に満ち

た青年僧の目。守り継がれている寺の水辺。

清々しい読経が流れ、新任職を歓迎する寺の

様子が厳かに表出されている。

奨励賞「いのちの楽園」

夏旺んペンギン舎より潮の香

アイス舐め耳そよぐ象独り占め

兎に迫るきりんの貌よ雲の峰

動物園を命の楽園として捉え、その景をみ

ごとに映像化している。動物の匂いや耳や貌

が生き生きと迫ってくる。読み手に次への期

待感を抱かせる。

奨励賞「城跡散策」

隅櫓巢を張る蜘蛛の忍者めく

木洩れ陽やあきつを肩に藩主の像

守る人ありて久保田の秋麗

今は千秋公園となつている久保田城跡を詠

んでいる。一句目「忍者めく」とはいかにも

城跡らしく印象深い表出である。一句一句の

完成度も高くまとまつている。

入選「縄文土偶寸描」

縄文のビーナス像とふ雲の峰

縄文のビーナス像と「雲の峰」の取り合わ

せが絶妙。ビーナス像に躍動感が生まれた。

入選「思い出のふるさと」

根元から始まる雪解ぶなの森

根開きはぶなの森の一木一草を見逃さな

い。見事なふるさと賛歌になった。

入選「十三夜」

本棚は父のふところ十三夜

本棚は「父のふところ」の措辞が見事。さ

らに「十三夜」を取り合わせたことが秀逸。

入選「夏書」

臨書する義之の心経わが夏書

母の形見の端溪硯を使つての夏書であろう

か。王羲之の手本に身が引き締まる。

入選「暮らしのほとり」

古紙古書の十字結びや燕来る

ゆつたりと流れる日常。「十字結び」と「

燕来る」の取り合わせが極めて斬新である。

入選「漆紙文書の国」

焼山に出土の火輪鶏頭花
かりん

焼山遺跡からの出土の火輪、鉄製であろう

か。「鶏頭花」の季語が非常に印象的であ

る。

入選「曼珠沙華」
まんじゆしゃげ

農一揆ありし境内曼珠沙華

どのような庄政があつたのか。「農一揆」

と「曼珠沙華」が照応し歴史を感じさせる。

入選「日は海へ」

練焼く煙の匂ひ日は海へ

匂に臭気を持たせることで、日常生活感

を色濃く表出させている。

入選「廃校」

卒業のタイムカプセル大櫓

廃校の学校。大櫓が子どもたちの成長をタ

イムカプセルとともに見守っている。

グリーン賞「青春謳歌」

恋をして初めて知つた校色

ほとぼしる青春の思いを表出。素直な描写

の中に作者の感性が光る。続けて欲しい。

秋田県現代俳句協会副会長・幹事長



選評

佐々木 公平

「俳句」の面白さの一つは、作品の評価の多様性にある。「佳句は誰れが見ても佳句」ということか。だが「選者が異なれば選句も異なる」方が圧倒的に多い。作品の評価は「詠み手」と「読み手」との評価と共同作業によって決まる。

選句は一種の創作とも言われ、一句を読んで抱くイメージは十人十色。この多様性が俳句の面白さです。

最優秀賞 「日記の余白」

今年また写真の妻と花の旅

妻の声聞こえるやうな星月夜

亡き妻の日記の余白秋深む

長年連れ添ってきた夫婦の情愛をみごとにとらえた佳句。喜びも悲しみも幾年月だったに違いない。大きな破綻も見せず、まとまった作品といえる。

奨励賞 「晋山法要」

法螺の音の響く法要寺日永

夕立や奥の暗がり羅漢像

僧侶が新たに一寺の住職となる荘厳な儀式。てらいや派手さのない、堅実な詠み振りと言える。

奨励賞 「いのちの楽園」

夏旺んペンギン舎より潮の香

児に迫るぎりんの貌よ雲の峰

動物園は憩いの場であるとともに、命の教育の場でもある。動物達が生き生きとして、素材にふさわしく、切れ味が新鮮。

奨励賞 「城跡散策」

ぬつと出て猛者の風体いぼむしり

木洩れ陽やあきつを肩に藩主の像

作者は日頃から散歩を楽しんでいるのでしよう。難解な句もなく、やや単調さが見られるが、素直な詠みぶりに好感がもてた。

入選 「縄文土偶寸描」

豊満な土偶の乳房夏旺る

入選 「思い出のふるさと」

新葦へ大の字ジャンプあにおとと

入選 「十三夜」

本棚は父のふところ十三夜

入選 「夏書」

臨書する義之の心経わが夏書
入選 「暮らしのほとり」

古紙古書の十字結びや燕来る
入選 「漆紙文書の国」

腕朽ちて熱砂に残る漆の朱

入選 「曼珠沙華」

煉獄のあるてふ教曼珠沙華

入選 「日は海へ」

盃は新屋のガラス新走

入選 「廃校」

碑の校歌ぼつりと晩夏光

グリーン賞 「青春謳歌」

君のせい長く感じる夏休み

夏空に輝く姿体育祭



題名と一句の 自己完結性

佐藤 茂樹

この度、初めて選者を務めさせていただきました。七句提出で「題名」が課せられていましたが、そもそも俳句とは、説明・講釈を排し、一句一句が一般の常識人をして合理的に状況・句意を推測することが出来るか、換言すると、十七音を記した文字媒体として自己完結性・独立性があるか否かが重要であろうと考えております。

したがって、特筆すべき句が一句でもあれば、その度合によって入賞以上とし、七句のまとまり、平均値は次に見ました。

以下、かかる視点で私が事前審査上、注目した作品について触れます。

「稲作り」

穢れなき水面廻して種選ぶ

源流の遠嶺を仰ぎ代騒ぎす

天地人摂理誘ふ青田波

生命線摩する稲穂の重さかな

一分の隙もない下五まで緊張感に満ちた句

調、「生命線摩する」の命を削る農作業の過酷さが格調の高い言葉で表現されている。

「日記の余白」

今年また写真の妻と花の旅

薔薇を剪る妻の遺愛の花鉢

亡き妻の椅子も並べて夕牡丹

亡き妻の日記の余白秋深む

奥様への深い思い。残された花鉢や椅子との語らい。日記の余白の白が目を打つ。

「思い出のふるさと」

春祭母は十八番の「支那の夜」

駅までの歩きの三里青田風

新藁へ大の字ジャンプあにおとと

地吹雪や体寄せ合う登校児

秋田のかつての風景・風物を見事に再現。

戦争を挟んで戦前・戦後を生きた人々の共通項であるヒット曲や「三里」という距離感

覚、地吹雪など、句材に説得力がある。

「盆踊り」

雷雨去りいよよ地霊はかがり火へ

農の手を月にかざして端縫いかな

更けてなほ音頭つやめく踊りかな

踊り果て闇に消えゆく亡者の手

篝火に踊り手の項が光り手先が天に撓る。

更けてからの地口は際どいながらも大らかなユーモアを体する。踊りを網羅し活写。

「父の半生」

大地凍つシベリアへ捕虜泣く妻子

どぶろくや厚き頬紅泥^{どじよ}掬ひ

お父上の悲惨な抑留体験を詠んだ俳句は、

家族としても又、戦争の記録としても貴重。

「十三夜」

小さきより父似と言はれ白芙蓉

定年のなき父の背や菊日和

神主であられたお父上。定年なきが響く。

「里の春」

合格の靴は春泥ものとなぜ

山閑かひとりの音で蕨摘む

駘蕩とした日々、かく過ごしたきもの。

「暮らしのほとり」

シルバー席ゆづられて座す花疲れ

古紙古書の十字結びや燕来る

自らの境涯をしみじみ振り返る日々。

「追想」

雑魚寝する部屋に放ちし笛かな

山河あり村を挙げての運動会

夏らしい夏があり、秋らしい秋があった。

「曼珠沙華」

曼珠沙華かつて此処には隔離棟

煉獄のあるてふ教曼珠沙華

厳しい近代史の現実を曼珠沙華が象徴。

「晋山法要」

問答に応ふ青年目の涼し

野ざらしや読経のさまに蟬時雨

透徹とした禪、仏教哲学。

「送り火」

家系図に赤子加わり墓詣

銀漢の潤むようなり母捜す

先祖から連綿と続く命の繋がり。

俳人協会会員 香雨同人 同矢羽句会所属

川柳



柴田政幸

多くの川柳に接する

川柳は、他の文芸と違い約束事の少ないシンプルな文芸です。でも、奥の深い文芸で

す。よく壁にぶつかります。そんな時は、多くの川柳に接することです。そして、多くの川柳を詠うことです。今回も多くの川柳と接することができ、勉強になりました。

最優秀賞 さびしんぼ

・ 手探りの迷路を照らす月明かり

・ まず今日を生き切ることと言ひ聞かす

・ 小心とバレないように毒すこし

・ 強がりかまた邪魔をするさびしんぼ

全員の選者からの得点で高得点となり、すんなり最優秀賞に決まりました。心の寂しさを平易な言葉で、絶妙に十七文字で表現しています。粒選りな句は、私の琴線に触れ感性が強く揺さぶられました。

奨励賞 郷の風

・ 軽やかなリズムに変わる郷の風

・ 故郷の風着るように衣更え

・ 風鈴に訛りの風が吹くようだ

郷(さと)の現状を鋭くとらえ、郷への思いを素直に表現しています。郷を愛する心をひしひしと感じました。

奨励賞 昭和回想

・ 豪快な父 真綿のような母でした

・ 青春の空間ボクの四畳半

・ 昭和回想 時は流れて現在地

昭和生まれの私にとって、一句一句が、納得のいくすばらしい句でした。昭和生まれの心情がみごとに表現されています。

奨励賞 こんな夏

・ 涼しげな夏を迎える畳替え

・ 髪切るか結ぶか暑い昼下がりに

・ しんみりと語りたいのに晴れ渡る

夏の生活の中での心境を、切々と正確に表現しています。夏はただ暑いだけではないのですね。

入選 再起

・ 夕映えに真つ赤に染まる明日の夢

・ 五感まだ咲かす卒寿の花の笑み

卒寿という人生経験があるから、詠える句です。前向きに力強く毎日を生きている姿に、励まされると共に幸せを感じます。

入選 再会

・ ふるさとへ丸い話をおみやげに

・ おもかげの君がちらつく里景色

ふるさとに多くの良き思い出を持っているから、詠える句が並んでいます。

入選 忘却の中で

- ・あの時の甘い疼きが胸にある
- ・忘却の彼方に置いてある本音
- 自分の心の底に置いてある本心を、実に巧みに詠っています。

入選 石けり

- ・石けりの足が今でもまだ弾む
- ・ゆつくりと秋の一部になるわたし
- 軽やかなリズムの中で、句が息づいています。平仮名の使い方が実に巧みです。

結びに、入選に今一步の方の作品から心に残った句を紹介します。

地の叫び

- ・天気図に地球の機嫌推し量る

見せ掛け

- ・手を合わす何故か優しくなる心

道程

- ・咲ききつてほんのり余韻姥桜

ささやか

- ・ささやかに生きて来た道悔いはなし

黄昏の唄

- ・言い訳はしない黙って背を晒す

コロナ禍を生き延びて

- ・百歳のカルテに透ける処方箋

捨てる

- ・断捨離の決意が鈍る墓仕舞

ふあうすと川柳社同人

ふるしろ川柳会主宰



作品に
ドラマを！

藤 咲 子

この選を担当して2期目通算5回目となりました。応募数は昨年より若干増加したものの、全体的には年々減少化傾向にあることや、参加者の高齢化が進んでいることを憂慮しています。また、グリーン賞受賞者が今回も該当なかったことを残念に思います。

選に当たっては「あきたの文芸」は文芸の

戦いの場であるとの認識を持っていますので、誤字脱字等はあつてはならないと考えますが、今回も誤字脱字や送り仮名の誤りなどが多くて残念に思いました。でも皆さんが真剣に取り組まれた作品ですので、私なりに評価をさせていただきます。川柳は単なる報告句ではなく、その裏側にはドラマ性を感じ

られることが大事であると思っています。

最優秀賞 さびしんぼ

- ・ 手探りの迷路を照らす月明かり
- ・ まず今日を生き切ることと言ひ聞かす
- ・ 小心とバレないように毒すこし
- ・ 丸の中入りたくない入りたい

各選者がそれぞれ上位に選んだ作品でした。具象句と抽象句を程よく織り交ぜた一連の作品群がいい雰囲気醸し出しています。人間が生きていく上でさまざまに出会う事象というものを順序立てて並べ、説得力ある作品に仕上げられています。ベテラン作家を思いま

す。

奨励賞 郷の風

- ・ 近道をのんびり風を道連れに
- ・ 雀にも少子化という寒い風
- ・ 風鈴に訛りの風が吹くようだ

日常生活から題材を取り入れた、具象句中心の作品群と言え、自分の住む郷を愛してやまない心情を余すことなく表現しているようです。全体的に安定感があり、読む者に説得力をもつて迫ってくる句群と言えます。

奨励賞 昭和回想

- ・ 道草を食って芽生えた好奇心

・ 青春の空間ボクの四畳半

・ 昭和回想 時は流れて現在地

この作品は私が最高点を入れた作品群です。ポエムが程よく織り込まれた一連のさわやかな作品は、読む者に心地よく沁み込んできます。全体をよく推敲しております。さまざまな人生模様をうまく切り取ってドラマ風に仕立てる手法は流石で、感心させられました。一句の中の一字開けも適切で、全体に肩肘を張っていない作品群に好感を持ちました。

奨励賞 こんな夏

・ 涼しげな夏を迎える畳替え

・ しんみりと語りたいのに晴れ渡る

・ 円満な風の噂に癒やされる

ひと夏の情景を題材にして、奇を衒うことなく自然体に詠んでいます。全体に新鮮さが感じられる作風であり、気鋭ある女性作家を思わせます。具象句中心の作品群が読む者に納得感と安心感を与えています。

入選 再起

・ お借りした命磨いて返します

・ 蟠り忘れ上手に日を重ね

・ 夕映えに真つ赤に染まる明日の夢

老境を上手く詠んでおり、ベテラン作家を

思わせます。丁寧な配置された句群からは一連のストーリーが浮かんでくるようです。全体的に手慣れた作風でありますので、今後とも少しずつ視点を変えていくことも必要でしょう。

入選 再会

・ ふるさとへ丸い話をおみやげに

・ 初恋の火種を煽る不意の風

・ 木漏れ日を揺らすあなたと相聞歌

全体的に奇を衒わない作品群であり、すんなりと作者の想いが伝わってきます。「再会」という題に拘ったためとは思いますが、4句目と6句目が他の句群とは別方向を向いている感じがしますので、残念に思いました。

入選 忘却の中で

・ ずぶ濡れの過去からこぼれ出た寡黙

・ 炎の残像そつと抱いてる花鏡

・ 忘却の彼方に置いてある本音

これは私が上位2番目に選んだ作品ですが、過去の様々な情景というものを思い出しながら、具象と抽象を程よく織り交ぜた一連の作品群は、余韻の広がりとともに説得力を

もって迫ってきます。現代川柳調の実力ある作家を思います。

入選 石けり

・ 石けりの足が今でもまだ弾む

・ 雨上がるバトルを止めて薔薇を買う

・ ゆつくりと秋の一部になるわたし

全体的に地味な作品群ですが、シックな表現が多く、感性の良さを感じさせる作家です。今後とも視点を広めながら、更なる境地に立つて作句されることを期待します。

川柳銀の笛吟社 編集長



四十七人との 出会い

山崎 如 酔

四十七人との出会いにまず感謝する。

選考に当たっては、五七五の原則（例外的に破調句などを認める場合もある）誤字脱字の有無、漢字ひらがな片仮名の使い分け、助詞の使い方などの形式的なものから入った。句については、七句と題との関連性、発想の斬新性などに焦点を当てた。その結果、中六

や中八などの句は選考の土俵には上げなかった。

私の選んだ句は、入賞作品八作品中七作品が入賞した。

最優秀賞「さびしんぼ」

七句とも題を連想することができる。心の迷い、その葛藤が上手に描写されている。迷いながらの素直な気持ちを凝縮しているのが

丸の中入りたくない入りたい

だ。難しい言葉もなく、すんなりと心の中に入ってきた。結果的にこの句を最優秀賞として選んだ。

奨励賞「郷の風」

どの句も頭で考えて作句したのではなく、自身が実際に目にし、感じた光景を素直に詠んだものと思われた。どの句も題に溶け込んでいる。

風鈴に詛りの風が吹くようだ

この句の「詛りの風」に拍手をしたい。

奨励賞「昭和回想」

目新しい句ではないものの、子供時代から昭和を生きてきた証を淡々と詠んでいる。

そして令和の現在を

昭和回想 時は流れて現在地

で縮めている。自分史だろう。選者の自分にも通じるものがある。

奨励賞「こんな夏」

一年一年毎年違う夏。今年の夏だったのだろうか。

しんみりと語りたいのに晴れ渡る

下五「晴れ渡る」であるが、本来「晴れ」

は良い意味で使われるほうが多いが、ここでは邪魔者扱いにしている。この発想が良い。

ほやの味しつてやつぱり父さん似

女性の句だと思うが、母さんではなく父さんを対象とした点も良かった。

入選「再起」

若い人の「再起」だったら入選にはしなかっただろう。卒寿という年齢の人の「再起」だから感動した。

五感まだ咲かす卒寿の花の笑み

「咲かす」「花の笑み」から、これからも精一杯生きようとする気持ちが感じられる。

入選「再会」

色々な人との再会を詠んでいる。家族、友達、拉致された人、初恋の人、そして亡くなっている人など。少し欲張り感を感じた。

花香るあの日と同じ夕日影

「あの日と同じ」で縮めたのが良かった。入選「忘却の中で」

珍しく後ろ向き句だ。川柳は人の喜怒哀楽を詠む句だ。過去を引きずるように生きている哀しみや、苦しみが一句一句から伝わってくる。前向きな人間ばかりではないのがこの世だ。演歌もいいだろう。

炎の残像そつと抱いてる花鏡

未練だろうか。それとも、その思い出を忘れ得ず大事に抱いているのであろうか。

入選「石けり」

一句一句を見ると、洗練された柳人が詠んだと思う句だ。ただ「石けり」という題からかけ離れた句がある。もう少し題に近づけた句であつて欲しかった。それでも七句目

ゆつくりと秋の一部になるわたし

は見事な句だ。春でも夏でも冬でも駄目だ。ゆつくりと一部になるには「秋」だけだ。最優秀賞に選ばれたかつた句でもある。

もう少しだったのは「円らな瞳」「コロナ

禍を生きて」である。前者は孫を愛おむ気持ちが良い表れていたし、後者は百歳の闘いを見た気がする。十代がひとり投句している。育ててあげたい。川柳の会に入って勉強

してほしいと願う。

(川柳あきた・柳山泊・川柳宮城野所屬)

エッセイ



応募作品を 読んで

武田 幹夫

エッセイと随筆の違いに触れた応募作品がありました。筆者は「今まで書いてきたものはエッセイなのか」と自問して「悩ましい」という言葉で閉じています。応募者の多くが一度は思う疑問ではないかと推測します。

確かにエッセイと随筆の違いを強調する意見がありますが、一方ではエッセイと随筆の境界線は曖昧とする意見もあります。

思想感想と状況説明の割合をテーマとして意見が語られ、小論文のようなものから報告文のようなもので議論の対象となり混沌こんとんとしています。このような状況のなかにあつて

大切なことは、自分なりの基盤に沿って、思想感想と状況説明の割合を定め、それを個性として自信をもって書き進めることだと考えます。過去の論争を超えた、新しい姿のエッセイが誕生することも期待できます。

「母と野球」導入としての甥ねいとの通話↓高校野球↓プロ野球↓読むこと書くこと↓お茶会↓まとめ、と構成が整っています。部分を描いていき包括へと進み、伏線の敷き方も巧みです。小道具としてのノートが効果的です。

「街角ピアノを弾く二人旅」幸福感をもつための原点は何か、示唆に富む内容です。未来に希望や夢を託す明朗さには、元気のない心を目覚めさせるパワーがあります。時間の流れは素直で自然で、ドラマチックです。

「晩秋のある日の出来事」夫婦それぞれの意見を着地の幸福感で、うまくまとめています。話題が小刻みに進んでいく方法が興味を持续させます。賛否が分かれる表記法が使われていますが、新しい方法と判断しました。

「最近私が気になったこと」表記の標準化に努めており読みやすく好感がもてます。克明にメモする習慣とメモは必要ないと考える性

格が失敗の原因と分析しています。弱点の告白は多くの読者に考える機会を与えます。

「『おにぎり』の形」日常生活の中から共感素材を見つけられています。同じ時代を背負った人々の心に、悲しく楽しく、深く染み込むと思います。ローカルな食文化が風土と人間というテーマに発展する可能性を感じます。

「向う岸に渡る前に」歴史と環境の影響を受けて苦労続きの義母でしたが、秘話を聴く筆者の思いやりが伝わってきます。義母を外側から観察するのではなく、内側にいて一緒に生きてきたような筆者の温かさを感じます。

「ただ、生きる」昆虫や鳥の丁寧な観察から人間の生死へと思いを昇華させています。庭での出来事を淡々と描き、主語を人間に一気に変える手法に驚かされました。シンプルな生でよいとする結びに力強さを感じます。

「やらなかつた後悔よりもやつた後悔を選ぶ」自尊感情の低い状態を念入りに分析しています。このような告白は多くの読者の救いとなります。真新しい転機に臨み果敢に挑戦する姿は、生き方のヒントを与えてくれます。

「日本海、帰り道、鳥海山」急に帰省したく

なつた青春の一こまを丹念に描いています。

先が見えなくても未知の扉を開けてみる連続が若者です。その体験と感想は新鮮です。表現の分野が広がる可能性を感じます。

〈常用漢字の補足〉

昨年の選評で常用漢字に触れました。補足をさせていただきます。現行の常用漢字表は平成二十二年十一月に改定されています。関心のあるかたは、お使いの辞書の発行年月を確認してください。改定で追加された漢字や音訓があります。また、削除された漢字や音訓もあります。

常用漢字は目安であり制限ではありません。表外漢字や表外音訓の処置については自由ですが、読者の年齢や学習段階に配慮していただければ、ありがたいと思います。



話題選びの 難しや

中村 寿

エッセイ部門審査員三名による合議制審査の結果、本年度は応募作品全二十二作のうち四作が受賞対象となった。内訳は最優秀賞一作、奨励賞二作、入選一作。その他、二十五歳以下の文芸を奨励する目的で設けられたグリーン賞に一作が推薦された。

①最優秀賞 「母と野球」

本作では、作者の「母」の、野球への思いが描かれている。「母」の趣味は日記をつけること、高校野球の記録簿をつけること。そのため「母」の野球に関する知識は（友人はだし）なものとなっている。

「母」への温かなまなざしが感じられる一方で、「母」の野球との付き合い方に関する分析からは、一步引いた客観的な視線も感じられた。

以上の理由から、審査会は本作を最優秀賞に推薦した。

②奨励賞 「ただ、生きる」

本作では四季のめぐりが詩情豊かに綴られている。晩秋の日に見つけたハチのいないスズメバチの巣、蝶、ヒヨドリ、の巣立ち。家族の老いを受け止めようとしている作者に、小動物の誕生と成長の奇跡は癒しを、生きる意味を、改めて教えてくれる。

自然の営みに作者の心情を投影させていく手法には、審査員から「エッセイの王道」との評価が寄せられた。

③奨励賞 「日本海、帰り道、鳥海山」

作者は東京の大学に通う大学生。都会生活に閉塞感を感じ、仁賀保への一時帰省を決心する。小・中・高と環境になじめなかったこと、再出発のつもりで都会に出たことが明らかにされる。作者はこの帰省を通じて、風景も人間も変わっていくものだという確信を深めた。あれほど出たいと思っていた地元はそんなに捨てたものじゃない。

本作を読んだとき、評者は短い尺の映画を見ているような気分になった。感情表現に直情的過ぎる傾向が見られる。しかし、今後の

創作活動にエールを送る意味で、奨励賞の受賞となった。

④入選 「ぞうさんのうた」

本作は、作者の「母」の百一回目の誕生日とその人生の軌跡を描いている。「母」に対する作者の思いを伝えるには、評者による説明的な文章は不要だろう。本作から引用する。

「母がいることの満ち足りた思いには、限りがあることの哀しみが混じっている」。

上の文は誰が読んでも共感できるだろう。話題が一般的なこともあり、入選の評価になった。

⑤グリーン賞 「今も続いている『楽しみ』」

本作は高校三年生になってから、いわば中途で文芸部に入部した経験の持ち主からの投稿。綴られているのは、事物についての感想を言葉で他者に伝えることの困難さ。それで作者は言葉の力を信じ、他者と言葉を分か

ち合いたい。本作は「書くこと」を継続したいという作者の声明とも取れる。

構成の整理と推敲が必要であるが、文芸への思いが評価され、グリーン賞の受賞となった。今後の精進に期待したい。

⑥その他の投稿作品について

『道しるべ』は自伝エッセイ。村の婚礼の追憶からは映画を見ているような気分させてもらった。『エッセイの戸惑い』は思索的で読み応えがあった。作者によると、「随筆的エッセイ」は、事実をもとにしながらも、自身の感性が投影されているもの。評者は、本作を十分「随筆的エッセイ」として通用しうる、と思った。

⑦総括——話題選びの難しさ

奇抜で稀有なできごとと読者の共感を呼びにくい。一方で、ありふれた日常のできごとを書くことに終始してしまつては、作者のオリジナルな感性が伝わってこない。最優秀賞の受賞作は、野球というありふれた話題を取り上げながらも、作者の「母」という独自の視点を導入したうえで、野球ファンの心理を

分析しようとする試みであった。審査報告を書きながら、評者は「母と野球」が最優秀作品に推薦された理由に、改めて納得した。



バラエティ
豊かな応募作

渡辺 修

今回初めて随筆の審査を担当したが、思った以上に質が高く、嬉しい驚きであった。

最優秀賞の「母と野球」は、応募作の中でも頭一つ抜き出ていた。

作者の母の趣味は野球で、高校野球の時期には地元チームを応援し、「野球ノート」をつけている。事細かに記録されたこのノートがあれば、試合の実況ができるほどだ。WB Cでは大谷の活躍に大興奮し、プロ野球では東北楽天のファンである。

母の飾らない日常を淡々と描いた作品なのだが、この素材を料理する作者の力量が並外れている。農作業のかたわら、ラジオの野球中継に耳を傾ける母の姿が映像として浮かんでくるほどに巧い。出だしのビデオ通話か

ら、終わりのノートの銘柄まで、実に気が利いていて自然な流れである。

自分の親を語る作品は、ともすれば情緒的になりがちなのだが、作者は適度な距離感を保ちながら、眼差しに温もりが感じられて読後感も爽やかだった。

奨励賞の「ただ、生きる」は手堅い作品という印象だった。自宅の庭を訪れる虫や鳥たちを確かな観察眼で描いた作品である。

播らぎのない文章は、昨日今日書き始めた人ではないとすぐに察せられる。

惜しむらくは、エッセイとしてはよくある題材で、小さな生物たちが無心に生きる姿に共感を覚えるという展開も、新鮮な驚きに欠けるということである。実力は申し分ないので、もう一つ上を目指してもらいたい。

同じく奨励賞の「日本海、帰り道、鳥海山」は、不思議な読後感だった。

嫌いだつた秋田を逃れて東京の大学に入った「私」はすべてがうまくいかず、ヤケクソでにかほ市に帰省する。家族も海も山も昔のままだったが、かつての友だった田んぼの荒れ果てた姿を見て、故郷も自分も変わったのだと悟る……という内容である。

取り立てて事件が起こるわけでもなく、全体に気怠さと寂寥感が漂うのだが、反面ほっとする温かさも感じられる。

特筆すべきは瑞々しい文章と溢れ出る独特の感性で、これはもう才能と言うほかない。

日本海を眺めながら口にするハイボールの描写や、ラストで後ろ向きに走る「新幹線を持つてくるところなど秀逸であった。

エッセイ部門で言うのも変だが、この作者の小説を読んでみたいと思った。

入選となった「ぞうさんのうた」は高い文章力と、巧みな構成でまとめあげた作品。

内容は実体験かもしれないが、読者に「頭で考えた」と感じさせるのは問題だろう。

ラジオから「ぞうさん」が都合がよく流れ、「かあさんがすぎなのよ」まで歌詞を続けるのも意図が透けて見える。同じ作偽的でも、母が歌う「あゝそれなのに」のように、さらりと流せば気にならなかった。

老いた母を温かな目で見つめながら、迫りくる死期を、冷静に受け止めている作者の心情はリアルで、女性の凄味を感じた。十分な実力があるので、次が楽しみである。

グリーン賞の「今も続いている『楽しみ』」は、高校時代に「文芸」という楽しみに出会った思い出を綴った、若々しい作品である。

選に漏れているのだから、厳しいことを言えばきりが無いが、とにかく改行を心がけ、読みやすくしてほしい。同じことを何度も繰り返さず、無駄な言葉を削ぎ落そう。そうすれば、すっきりした作品になるだろう。

このほかでは、「『セイショウさん』に出会って」と「街角ピアノを弾く二人旅」が最後まで入選を争った。もう一息なので、次は頑張つてほしい。

あきた県民文化芸術祭2023「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R5年度	11	28	56	77	47	22	241
R4年度	9	32	61	77	39	24	242
R3年度	14	38	55	78	45	25	255
R2年度	10	41	63	91	54	25	284
R元年度	10	40	60	77	47	21	255

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R5年度	7	4	9	19	22	34	44	33	27	20	6	16	115	126
R4年度	7	2	13	19	24	37	39	38	25	14	12	12	120	122
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125
R2年度	7	3	10	31	23	40	51	40	37	17	16	9	144	140
R元年度	6	4	14	26	26	34	42	35	30	17	13	8	131	124

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
R5年度	241	20	9	1	10	9	38	81	65	8	0
R4年度	242	18	4	2	8	13	44	85	63	5	0
R3年度	255	11	6	3	10	21	51	77	68	7	1
R2年度	284	22	6	3	10	18	51	98	69	7	0
R元年度	255	20	4	1	10	23	49	89	55	4	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
小説・評論	2	0	0	1	1	3	3	1	0	0
詩	8	2	0	1	2	5	7	3	0	0
短歌	3	4	1	2	1	8	15	20	2	0
俳句	5	2	0	5	2	12	28	18	5	0
川柳	1	0	0	1	0	8	19	17	1	0
エッセイ	1	1	0	0	3	2	9	6	0	0

4 新旧割合（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	9	27	44	57	37	18	192
新	2	1	12	20	10	4	49
計	11	28	56	77	47	22	241

再…以前にも応募したことがある方

新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
33	27	181	241

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十五集（令和四年度）応募二百四十二作品

・小説・評論部門 奨励賞 坂本愛子 「暖鳥」
最優秀賞 深町一夫 「ホリゾントライト」
奨励賞 鈴木修一 「草の岬」

・詩部門 奨励賞 小林康子 「森の書店」
奨励賞 西村慧亮 「ラインの黄金」
最優秀賞 佐々木ヨリ子 「沙羅の花落つ」
奨励賞 蓬田真弓 「夜半に目覚めて」

・短歌部門 奨励賞 高橋岑夫 「嬬」
奨励賞 熊谷すが子 「みどりご来る」
最優秀賞 唐一平 「信仰の園」
奨励賞 佐々木亮子 「記念樹の桜」

・俳句部門 奨励賞 七尾理絵子 「夏の海」
奨励賞 山田草人 「通り土間」
最優秀賞 鈴木明夫 「いい眠り」
奨励賞 菅原浩洋 「一粒の種」

・川柳部門 奨励賞 川越柳伸 「恋の数式」
奨励賞 澤田幸代 「愛の果て」
奨励賞 高橋文子 「栗の花」
奨励賞 佐藤則英 「竹の子」

・エッセイ部門 奨励賞 阿部美和子 「小さな旅、心の色を微笑みに」
奨励賞 島山信英 「夜のしじまで」

編集後記

◎令和五年度あきた県民文化芸術祭2023
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸
第五十六集』を刊行しました。

この作品集は、十六歳から九十七歳までの応募
作品二百四十一編より、最優秀賞五編、奨励
賞十四編、入選二十二編、二十五歳以下の文
芸活動を応援するグリーン賞八編、計四十九
編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2023
の一環として実施しております。応募いただ
いた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をし
てくださった各市町村、報道機関、図書館な
どの文化施設、さらには、事前審査から選
考・校正まで多大なる御協力をいただいた選
考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく
親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、
一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十六集

あきた県民文化芸術祭2023

「あきたの文芸」入賞作品集

令和五年十一月十日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社大潟印刷

たくさんのご応募 ありがとうございました！

応募総数 241 作品

入賞 41 作品

小説・評論	1 編
詩	5 編
短歌	10 作品 70 首
俳句	13 作品 91 句
川柳	8 作品 56 句
エッセイ	4 編

グリーン賞 8 作品

小説・評論	詩	短歌	俳句	エッセイ
-------	---	----	----	------



ブンカ DE ゲンキ
はごちらから！



あきた県民
文化芸術祭

2023

あきたの文芸 第56集
入賞作品集
令和5年11月
発行・秋田県(非売品)